

# 妖 花

1

雪の降るひどく寒い日だった。

私はサンジェリイの南の外れ、ルフアンス街に向かっていた。ラグラン大通りは雪に覆われ、行き交う馬車の轍が幾筋もの絡み合う黒い絵模様を描いている。南市場もいつもの賑わいはなく、売り子の声も白い雪の中に吸い込まれて押し潰されていた。

曲がり角に来る度に嫌な軋む音を立てる辻馬車を、クペルの四つ角で降りて、私は走り使いの少年が持ってきた地図を頼りに歩いた。

私の灰緑の外套は、こんな雪の日に歩くにはいささか頼りなく、歩くうちに寒気が身体の芯に染み込んでくるようだった。

次第に家並は疎らになり、雪を被った茂みの合間合間に、打ち捨てられた屋敷の崩れた煉瓦塀や、骸骨のような姿となった大きな廃屋が目立つようになってくる。

ルフアンス街は十数年前までは、小金を貯めた商人や裕福な小貴族の屋敷が並ぶ街だったが、何処から持ち込まれたものなのか、紅腐熱なる流行病が起こり、多くの人々が死んだ。流行病が去った後も忌まわしい記憶と風説は残り、そこに新たに住み着こうというものは少なかった。

スターミネイド將軍の屋敷はそのルフアンス街の真ん中で、丈高い石塀に囲まれていた。一面の雪景色の中で、人の背丈の倍ほどもある石塀だけが白く染まることを拒むように、ざらざらとした黒っぽい肌を見せていた。

緑青のふいた青銅の門扉は、優雅な唐草模様とは裏腹に、エスカールの霜の巨人でも壊せないような頑丈な門がついていたが、半ば開け放たれたままになっていた。門衛の姿はない。

誰の足跡もない雪の中を、私は屋敷の方へ歩いた。白い冠を抱いた木々はあまり手入れをされているようには思えず、この雪が溶ければ、伸び放題の枯れた叢に覆われた荒れ果てた庭園が姿を現すのかもしれない。

母屋は駒形切り妻屋根が幾つも集まった、重々しくがつしりとした作りの建物だった。紅腐熱の流行よりも以前に作られたものに相違ない。だが、無骨な屋敷の外観はその母屋の背後に聳える、目を奪うような建物によつて、印象の大きく異なるものとなっていた。

二階建ての母屋よりも一層分丈高い、鉄と硝子の建築物は、いわゆる「温室」というもののようだった。サンジェリイの気候では育ち難い南方の草木を育てるため、富裕な商人や貴族、役人連中の間で、一時期流行つたものだ。だが、このように巨大なものは、見たことがない。硝子は白く曇っていたが、その中には、色濃い緑が見え隠れしていた。

白つ茶けた乾ききつた木材で作られた玄関の扉を叩くと、その扉よりも乾いた肌の執事が顔を出した。

「スナブ・ランケン、クーリカフ街の探偵です。当家の御主人の依頼で来ました」

執事はほとんど見えない銀灰色の眉を潜めて不快な表情を示したが、私が手紙を見せると、別人の、極めて職業的な笑顔を見せ、邸内に案内してくれた。

「スナブ・ランケン様のことなら、御主人様より承っております。このような天気故、御主人様は温室の方で、ランケン様を御待ちになつております。さ、さ、こちらへ」

執事は黄金と白磁と白銀が散りばめられた盗賊の夢のような幾つかの部屋を通り抜け、私を鋼と硝子の大温室へと案内した。

短い屋根付きの回廊で母屋と結ばれた温室の扉が開くと、熱気と

湿気、それに一言では形容し難い濃密な匂いが私を出迎えた。遠く南方遙かの密林がそこには再現されていた。

生き血のように赤いバンジュエーカの花がそこかしこに咲き乱れている。奇妙な細長い房となった紫色のタランヤの花、黄色に赤い斑紋の入ったユ・ツァンの花が鮮やかさを競い、青白い燐光を放つというフオチュナの小さな寶石のような花も色を添えている。

だが、大温室の支配者は、濃厚な緑だった。黄色みを帯びたものから黒光りするものまで、様々な緑が大温室を満たしていた。子どもを包んでしまえるかのような巨大な葉を重ねたナーブナの木が見上げるようにそそり立ち、スファールの長く伸びた葉は大蛇のように絡み合い、ロアイナの葉叢は無数の緑の髪持つ生首のように奇怪な姿を見せていた。

執事は、まるでその土に靴先が触れると恐ろしい疫病にかかると思っているかのように、湿った黒土の上に置かれた平たい敷石の上を注意深く歩み、曲がりくねった通路を温室の中央へと案内した。

温室は奥へ行くほど暑く、湿り気を増し、木々の緑も濃くなつていくようだった。凍えて痺れていた足先に血の気が戻り、むず痒い感じがした。胸元にはうつすらと汗をかくような感さえあつた。

私は歩きながら、腰に吊ったファバーン剣の柄に触れてみた。太古の魔剣は、あやかしの力が働いている場で持ち主にそのことを伝えてくれる。微かに伝わってくる痺れるような感じは、ここに何らかの妖術の気があることを示していた。

突然視界が開けた。温室の中央は小さな広場のようになっていた。真ん中には、噴水や彫像の代わりに巨大な蒸気缶があつた。無数の鋳が打たれた黒塗りの鋼の半球が、しゅうしゅう、ごうごうという低い音を立てていた。上部に放射状に取り付けられた鋼の管から、間欠的に白い蒸気が噴き出している。小さな覗き窓からは黄色い強い光が漏れ、その中の熱と炎の激しさを物語っていた。

老人は、その蒸気缶の前に座っていた。黒い漆塗りの車椅子は螺鈿と銀細工に覆われ、まるで玉座のようだった。彼の身体を覆う分

厚い毛布は、私の記憶に間違いがなければ、ラトリオンの氷湖の漁師たちのためだけに作られると喧伝される鮮やかな色彩の代物だった。無論、サンジェリイで手に入れることの出来る人間は、極めて限られている。

その毛布と、艶やかな密林の緑、鮮やかな南の花々に囲まれてそこに座る老人には、色というものがなかった。

無数の小さなしわに覆われた顔は、かつては日に焼けた逞しい黒さを誇っていたのかもしれないが、今は幾度も洗つて色の抜けた衣服のように、灰色だった。頭巾のように被つた毛布から覗く短い髪も、太いが疎らな眉毛も乾いた灰色、肌の裂け目のような薄い唇にも色はなく、高い額の下の淀んだ目も灰色だった。

角張つた顎と額、角材を貼付けたような長い鼻は、新聞の戯画に登場する軍人のようだった。

「御主人様、こちらがクーリカフ街の探偵、スナブ・ランケン様でございます」

灰色の老人はしわの寄つた口元をわずかに動かし、かすれた声を出した。声が目で見えるものなら、それも灰色だったろう。

「飲み物はどうかね。ナクシャッツから運ばせた良いブゴムがある」

スターミネイド將軍は、フランジースコ辺りから取り寄せたかのような口調で言つたが、その酒が密林の港からこの街へ届くまでには二月は船艙で揺られていたはずだった。

「いただきます」

私が答えると、執事がつやつやとした木彫りの酒杯に赤みを帯びた蜂蜜色の酒を注いで持つてきた。黄色いユ・ツァンの花びらが浮いている。

「この花を、嚙んで飲むのだ。私のような者でも、心の臓に火が点る」

將軍は、自嘲的な歪んだ笑いを浮かべて、震える手で酒杯を傾けた。毛布の中から現れた両の手は、灰色の薄い手袋に包まれている

た。

私は世界を放浪するの旅の途中で、ナクシャツツの密林王国に足を踏み入れたことがあった。彼の地で、そうした酒の飲み方をするのは、酒に酔う以外に何も希望を持ってない者だった。

私は黄色い花びらはそのままに、グゴムを一口、含んだ。腐った果実を思わせる独特の芳香と味わいが、鼻と口に広がった。

「さて、ランケン君、君には探し出してほしいものがある。花だ。大切な私の花を探し出してほしいのだ」

彼が「私の花」と言った時、その一瞬だけ、灰色の仮面に人間らしい色が現れ、灰色の瞳に光が宿ったような気がした。

「新しいデイコールの苗でも盗まれましたか？近頃は、信じ難い高値で取引されることもあると聞いています」

スターミネイド將軍はユ・ツァンの花びらを口中で転がし、その麻葉のような味わいを確かめてから、私の問いに答えた。

「デイコールの苗と花は、確かにこの大温室の蒸気缶に火を絶やさぬ為に、役立ってはいる。馬鹿げた値でも買っていく俗物紳士は、幾らでもいるからな。だが、そんな物を探す為に、君を雇おうというのではない」

彼の灰色の瞳が、私の背後のどこかに焦点を結んだような気がした。

「そこに植えられていた私の花が盗まれたのだ」

將軍は灰色の手袋の指で、私の斜め後ろあたりを指さした。指先が震えているのは、病のせいなのだろうか、感情の昂りのせいなのだろうか。

老人が指さしたあたりは、黒っぽい土が掻き乱され、差し渡しも深さも二メートル（二メートルは約三十センチ）ほどの穴があいていた。

「ここには何が植わっていたのですか」

スターミネイド將軍は、かすめる声に少し力を入れて答えた。

「私の花が植わっていたのだ。レルウェルが」

そう言う將軍の肩が震えているのは、齢や病のせいではなさそうだった。

「私はエイマン王陛下に仕える金蹄隊の一員として、幾つもの戦に加わってきた。陛下は戦よりも交易による益を良しとする賢明な御方だが、それでも、金蹄隊はフランジースコとの長年の小競り合いやコリゾットの愚王の乱、時には白銀街道沿いの山賊どもの討伐などに剣を振るってきた。私は武勲を立て、將軍となった。陛下が異国の古の都邑や廃寺に惹かれるようになってからは、シュヌベル大学の学者たちとともに、金蹄隊を率いて古怪な廃墟に足を踏み入れることも、我らの役目となった」

この武人がシュヌベル大学の教授たちの御供という役目に満足であつたのかは、いささか疑問だったが、老將軍は恬淡として話を進めた。

「ナクシャツツの密林王国のさらに南、マツァオン・グランゾと呼ばれる大河の河畔に広がる大密林の中で、メルカーの人間にはまったく知られていない遺跡を調べていたときのことだ。深い緑の中に、忽然と現れた石造りの大遺構だ。凹凸の多い台形の上に、丸みを帯びた小さな塔が何十も立っていた。奇怪な絵文字のようなものが遺跡全体をびつしりと覆っていた。学者たちは絵文字の一部を読み解き、それがナクシャツツ古王国より、さらに千年は遡る時代の、何らかの神を祀った神殿であることを突き止めた。

「学者たちは、如何なる神なのかということについて激論を交わしていた。ある者は豊穰を約束する農耕の神であると主張し、ある者は男女の睦言にかかわる快樂の神であると言い張った。

「私はそうした議論を聞くのにも飽いて、神殿の地下の冷気を求め、仄暗い通路を下った。かつては輝く宝玉を象眼されていたらしい神像の残骸が散らばる暗い通路の果てに、私はある部屋を発見した。

「天井の高い四角い石造りの部屋には、奥に階段状の祭壇のようなものが築かれていた。その真ん中に奇怪な植物が生えていた」

スターミネイド將軍はそこで言葉を切り、私の足下あたりに視線を送った。無論、私の雪と泥に濡れた長杵を見ているわけではなかった。

「ランケン君、もう一杯ブゴムはどうかね」

杯の中には、まだ半分ほど酒が残っていたが、私は老人に感謝の意を表した。執事は魔法のような素早さと優雅さで、二杯目の酒を注いだ。

金蹄隊を率いた將軍は静かに木彫りの杯を傾けた。手の震えはいつの間にか治まっていた。

「人面花というものを知っているかね」

將軍は静かにそう尋ねた。

「花びらの斑紋や、雄蕊、雌蕊の形から、人の顔のように見える花のことですか、それとも、別の意味でしょうかね」

裂け目のような口を歪ませて、彼は皮肉な笑みを作った。

「ただの珍しい花のことで、君を呼び寄せるはずはなからう。魔道探偵を雇うにはそれなりの理由がある」

私は些かの不快感を込めて、返答した。

「念のために言っておきますが、僕は魔術を使えるわけでもなく、幻視者でもない。たまたま、そういう事件を扱うことが人より多いだけです。この雪では、いずれ辻馬車も走れなくなるかもしれない。クーリカフ街まで帰り着くには、足先が凍りつく。仕事は手早くすませましょう」

スターミネイド將軍は「無礼者め」と言いたかったのかもしれないが、灰色の顔に無表情を貼り付かせて小さくうなずき、話を続けた。

「マツアオン・グランゾの廃墟で見つけたものは、真の人面花だ。鮮やかな緑の薄葉が幾重にも重なった茎は、なよやかな曲線を描く緑の薄衣に包まれた女体そのものだった。差し上げられた両の腕のような枝分かれした部分からは、何枚もの紫がかった大葉が優美に垂れ下がり、私をその葉叢の中へ招いていた。花は差し渡しが

二イート（約六十センチ）はあった。真つ赤な血の色をしていて、天鵞絨のような柔らかな艶があった。襲の多い花卉の真ん中から人の頭ほどの薄桃色の卵形のものが顔を出していた。それは薄衣を巻き付けた女の顔のように見えた。

「花の後ろのあたりからは、白っぽい黄緑色の蔓のようなものが何本も生えていた。蔓といっても子ども腕ほどの太さがある。それが渦巻き、振じれて、絡み合って、蜘蛛の巣のように石室の中に広がっていた」

老人は再び言葉を途切れさせ、私の足下あたりを虚ろに見遣った。二杯目のブゴムを飲み干したが、しわだらけの頬は灰色のままだった。

「ここにその人面花が植わっていたのですね」

私は斜め後ろの穴に目を落として聞いた。

將軍はわずかに首を振り否定の意を示した。

「そこにいたのは、私のレルウエルだ」

私は黙って話の続きを待つことにした。執事が三杯目の飲み物をどうかと目顔で尋ねたが、老人は小さく手を振り断った。

「神殿がその花の為に建てられたものだとは悟った。自分が、その花にどうしようもなく、魅入られてしまったことも。だが、サンジェリィに持ち帰る術を考える暇はなかった。通廊の向こうから、聞き慣れない鬨の声と悲鳴が聞こえてきたのだ。

「マツアオ・モルゴと呼ばれる密林の住人の襲撃だった。獣の骨を焼いた灰を身体に塗り、青や赤、白の奇怪な刺青をした蛮族だ。神殿に辿り着くまで吹矢や弓矢で幾度か襲われ、首繩の罫を仕掛けられたこともある。その度に打ち払っていたが、今度はこれまでにない人数と激しさだった。

「我が金蹄隊は勇猛果敢に闘い、蛮どもを血祭りに上げたが、多勢に無勢の上、奴らは卑劣にも毒霧を炊いた。赤紫の霧が漂ってきたかと思うと、次々と我が戦士たちは血を吐いて倒れ伏した。私は幾人かの兵と共に、何とか毒霧を逃れ、神殿から脱出した。

「私は人面花の咲く石室から、『種』を持ち帰った。階段状の祭壇にうやうやしく鎮座していた一イート近くある褐色の卵形のものだ。サンジェリィへの帰途は苦難の連続だった。兵士たちは皆死に、私だけが一年後に帰還した。私は歩くことも出来ない身体となったが、『種』だけは手放さなかった。そして、十五年の歳月をかけて、私のレルウエルを育て上げたのだ」

「私のレルウエル」などという言い回しは、この灰色の老人にはまったく似つかわしくなかった。選り抜きの頑健な軍人であつたらう十五年前の彼にも似あわしい言葉とは思えない。自ら魅入られてしまったという通り、彼はその妖しい花に取り憑かれているのだから。

「その大切な花が持ち去られたというのですね」

「そうだ。そこに、私のレルウエルはいたのだ。もうじき……もうじき、花が開き、その姿を現すところだったのだ。メルカーの人間が誰も見たことのない神秘の花が、この世ならざる美の化身が、そこに生まれ出るはずだったのだ！」

再び、手袋に包まれた手が震え出し、声音はざらざらと荒れたものとなった。

「私のレルウエルを取り返してくれ。報酬は君の決まりの額の倍、払おう、いや三倍でもかまわん。私の人生には、あれしかないのだ。生きる望みはあれだけなのだ。頼む」

スターミネイド將軍は瘡癩いのように全身を震わせ、手にした酒杯を落とした。執事が静かに、しかしこの上なく素早く近づき、水と丸薬を飲ませた。

蒸気缶のたてる轟々という音がひときわ高まり、無数の緑の葉が、それに合わせて揺れているような気がした。

有能な執事が、帰りの馬車を手配してくれてた。私はそのびかびかと光る黒塗りの馬車に乗り込んだが、行く先はクーリカフ街の我が家ではなく、トリプロ街の某所を告げた。御者台の男は、露骨に嫌そうな表情を見せたが、執事がそれなりの金子を与えているのだろう、馬首をそちらに向けた。

葉のせいかな、静かに眠り込んだ依頼主に代わって、眉毛の見えない執事が必要なことを話してくれた。

レルウエルと名付けられた人面花を育てるために、三年程前に南方の魔術に詳しいという触れ込みの魔道士を雇ったこと、その魔道士は顔に大きな傷があると言い、いつも頭巾と仮面を被っていたこと、ナルカージェと名乗っていたこと、週に一度程現れ必要な施術を行い、住処は明かさなかつたこと、盗まれたのは一週間程前だということ、住み込みで働いていた二人のスベルコ人の庭師も同時に姿を消していること、など。

將軍も執事も「私のレルウエル」を奪ったのは、その魔道士だと考えていた。二人の庭師には相応の金は与えていたが、魔道士にそのかされたのか、脅されたのか、あるいは不可思議な力で協力させられたかもしれないという話だった。

「失礼ですが、御家族はおられないのですか」

そう尋ねると、執事は見えない眉毛を八の字にして悲嘆の表情を作った。

「御息と奥方、御孫さんが二人おられました。皆、紅腐熱で亡くなりました。御主人様にはあの花を育て上げることだけが生きるための只一つの抛り所なのです」

「なぜ、その花を私のレルウエルと呼ぶのですか」

執事はしばらく答えず、眠り込む主人の方を見ていた。灰色の老人は微かにいびきをかいていた。

「レルウエルというのは、御主人様が初めて恋慕の情を抱いた御婦人の名だとお聞きしたことがあります」

そう言って執事は目を伏せた。

馬車は小やみになってきた雪の中を走り、腐れ貴族の大層な御殿が建ち並ぶアイトーネ街を横目にして、サンジェリイで最も悪名高い街へと入っていった。

翌朝には身ぐるみ剥がされて川面に浮かぶことになるかも知れぬ紅灯の巷や、巾着切りや盗賊の巢窟となっている街は、他にもあるが、トリプロ街の悪評はそうしたものではなかった。

急に細くなり石畳も荒れたものになる街路の両側には、路にのしかかるように古びた家々が立ち並び、あらゆる種類のト占、怪しげな効能をうたう薬師、靈妙な力を持つ異国の宝玉等々の看板が、互いの珍奇さを競っている。

入り口近くのそうした店々が並ぶあたりには、独特の華やかさともいえるべきものがあり、神頼みに来る御客、冷やかし半分の酔客などで、それなりの賑わいもあるが、さらに路幅が狭くなり、左右の家々の屋根が頭上で結びつきそうなあたりまで入り込むと、そこは真つ当な人間がおいそれとやってくるころではないことが、明らかに becoming くる。

ほとんど消えかかったウオモレン（共通語）ではない奇怪な絵文字で綴られた呪文のような看板、生き物のようにくねる漂う霞のようなもの、足下を横切る鼠なのか猫なのか、判然としない生き物、店先に並んだ黄色く変色し歪んだ髑髏は、果たして人間のものなのだろうか……。

御者はそうした路々に入り込む前に馬車を止めた。金を積まれても出来ないことはある。

雪はトリプロ街にも公平に降り積もり、暗い灰色と褪せた褐色の崩れそうな家並を純白の美しい世界に変えていた。私は誰の足跡もない曲がりくねった細い路を歩き、さらに二人がすれ違えるかどうかという細い路地に足を踏み入れた。

蝙蝠か鼠らしい生き物の干涸びた死骸が幾つも干してある荒屋の扉を私は叩いた。小さな覗き窓が開き、よく動く目が私の姿を確認

すると、扉は開いた。

蛇革のヤムラスは、小さな火の燃える暖炉の前に座り、両手を広げて歓迎の意を示した。家の中には、無数の蛇、蛙、蜥蜴、鼠、百足、その他得体の知れない生き物の死骸が、吊るされたり折り重なったり瓶詰めになったりしている。古びた机の上の石の鉢では、毒蛇の木乃伊が半分ほど潰されて粉となっていた。

ヤムラスの仕事は、トリプロ街の魔法医や古い師相手に、こうした「材料」を卸すことだった。もちろん自分で作る、あるいは弟子の仕事としている者も多いのだろうが、ヤムラスの「材料」は上物だと評判もよく、本物の魔道士の中にも鼻屑にしている者がいるという。

だが、私が彼のもとを訪れたのは、沼地で採った蠹の干物を買うためではない。

「こんな雪の日に御来訪とは、探偵稼業も繁盛というところかい」ヤムラスは赤みを帯びた乱杭歯をむき出してにやりと笑った。痩せて血色が悪い小男だが、本人は自分で調合した妙薬のせいで、至って健やかであると主張していた。その名の通り、黒と紺と赤の鱗が光る蛇革の胴衣を着ている。その昔、ボンガール河で採った巨大な水蛇の革だという話だが、真偽の程は定かではない。

「御前さんと違って、御鼻筋を持つてるわけじゃないんでね。雪の日でも凍えながら働かなきゃならない」

怪しげな薬師は、妙に色の濃い緑がかかった御茶を入れてくれた。きな臭いような匂いと舌を刺すような味がしたが、身体は温まっていた。

「ナルカージェという名の魔道士を知っているか。ナクシャツツあたり、南方の魔術に詳しい男らしい」

蛇革の胴衣の男は、瓶から注いだ赤褐色の液体に湯を注いで自分の飲み物を作った。広がる異臭に、それを勧められなかったことを感謝した。

「いいや、ランケン、そんな名前の道士は俺の商売相手にはおらん

な。噂にも聞いたことがない。もっとも、妖術使いがいつも同じ名前を使うとは限らんがな」

私はうなずき、さらに質問をした。

「ナクシャッツの幻術を使う手合いは知らないか」

ヤムラスは特性の赤い御茶を口に含み、目を細めて味わい、飲み干した。

「御前も知っているだろうが、サンジェリーの魔道士は、クアロニアン帝国時代以前からこの地に棲む者や、東部から流れてきた者が多い。中にはアニヤチや西の大海の向こうからやってきたという者もいるが、密林王国からの来訪者というのはいない。仮にこのトリプロ街で、そういう奴が何かをしようとすれば、噂は必ず僕の耳にも入ってくる」

私はきな臭い御茶をすすり、ナルカージェの別の特徴を話してみた。

「その魔道士は、いつも頭巾と仮面で顔を隠している。ひどい傷痕がある」

今度は少しだけ考える間を置いて、彼は答えた。

「一つ目のエイジォスは、顔半分をいつも隠してはいるが、あれは東部の戦での裏切り行為の結果だ。ヴェレ・グー・キナは確かにいつも仮面と包帯で顔を隠していたが、一年前に死んだ。自らにかけた口寄せの術に失敗したのだ。僕はあれこれ良い物を工面したのだがのう……。顔なしモードレイは、半年前までは白い仮面をつけていたが、あれは未熟さを隠すはったり、今や美顔のモードレインと名乗って、いんちぎ占いで奥方どもから金を巻き上げている。他には心当たりがない」

スターミネイド家の大温室に入りにしていた魔道士は、トリプロ街とは縁のない者なのかもしれない。私はもう一つの質問を試みることにした。

「マツアオン・グランゾの人面花について、何か知っていることはないか」

魔道士崩れの薬師は、半分は粉になった蛇の木乃伊を手に取り、振って見せた。

「マツアオン・グランゾというのは、ナクシャッツのさらに奥にあるという大密林だか、大河だかの名前だな。それだけは知っているよ。血吸い蔦とその効能についても知っているが、あれはボンガルでも採れるし、花は咲かない。俺が知っている人面花は、処刑された男の精液で育つというイオロップのものだな。あれは、実はマナ・ドラーカの変種だろうというのが、俺の持論だが……」

蛇草のヤムラスは事情通として私にとつて有り難い存在だったが、蘊蓄を傾け出すと切りのない男でもあった。

「有り難う、ヤムラス」

私は蛇の粉が入っている石鉢の側に、執事に渡された手付けの金貨を一枚置いた。

「気をつけることだ、ランケン。南方の魔術について知る者はサンジェリーにはほとんどおらん。ましてや、それを打ち破る術については……」

「有り難う。こんな雪の日だからね、南の幻術師は、猫みたいに暖炉の前から動かないだろうよ」

「だいたい……」

もちろん、事を起こしているというのに、そんな怠惰な魔道士がいるはずもなかった。彼らは暖炉の前で眠っていても、猫のように静かに鈎爪のついた手を獲物にのぼすことが出来るのだ。

私はヤムラスの店を出た足で、さらにトリプロ街を歩き回り、南方から来た魔法使いについて、イオロップのものとは血筋の違うらしい人面花について、尋ねて回った。誰も何も知らなかった。とあ

る葉草屋では、イオロープ産だというマンナ・ドラーカの根を売りつけられそうになった。二股に分かれたその人肌色の根茎は、確かに歪な人間の戯画のようだったが、スターミネイド将軍が「私のレルウエル」と呼び慕う代物には到底見えなかった。

雪はやんだが、寒さはいや増し、手足の指先はどんなに強大な魔法が行なわれて、ファバーン剣がかつてない活性化を示そうとも、感じ取れないであろうほど、凍えきつていた。

私は昼食をとっていないことを思い出し、トリプロ街を出たあたりの横丁の飯屋に入った。汁は熱過ぎ、煮物はぬるかったが、冷えきった身体を温めることは出来た。

店を出ると、私を待っているものがあつた。

決して狭い路地というわけではなく、馬車も通れる程の路のはずだったが、奇妙に狭まっているような感じがした。厚い雲の向こうの陽は傾き始め、冷たい鋼色の薄闇があたりを覆っていた。

その小暗い闇の向こう、通りの奥の暗がりから、奇妙な男が近づいて来る。

黒っぽい外套を羽織り、頭には天辺が平で鰐広の黒い帽子をかぶっている。手足は棒のように細長く、雪道の冷たさに耐えかねるのか、爪先立ち、両の手に持った細い杖について歩いてくる。脚萎えて杖をついているのかと言えば、そういう風でもなく、流れるような動きで近づいてくる。

長槍の届く程まで近づくと、その男は立ち止まり、ぎりぎり、しゅうしゅうという奇怪極まりない声を発した。かろうじて何を言っているのか、聞き取ることは出来た。

「……お、おまえが……スナブ・ラ……ラン……ランケンか」

帽子の鰐に隠れて見えないその男の口と舌は、人間の言葉を発するのには不向きな作りのようだった。

「いかにも。だいぶ、僕も名が売れてきたようだ。こんな雪の日に、二人目の御指名だよ。そっちも名乗ったらどうだ」

ぎりぎりという音が強まり、そいつなりの怒声なのか、しゅう

しゅうという音は大きな輪の鳴る音のようになった。

「人の似姿では貴様の名は語ることも出来まい」

怪人は私の挑発に乗り、黒い外套と帽子を投げ捨てた。杖をついているような両の腕は動かなかった。他の腕で外套と帽子を脱ぎ捨てたのだ。

それは、人間位の大きさの蜘蛛だと言えば良いのだろうか、身体の輪郭自体は人のものに近い。ただ、人間らしい手足の代わりに、細長く幾つもの節を持つ八本の蜘蛛の脚が生えているのだ。杖と見えたのは、そいつの脚の一部だった。

四本の脚が下半身を支え、不自然に上方に折れ曲がった上半身から生えた四本の腕が、攻め寄ろうとする意志を明らかにしている。

黒い剛毛の生えた丸い頭には、赤い小さな目玉が不規則に幾つも埋め込まれている。おぞましいことに、その内二つは、明らかに血走った人間の目だった。口の部分には、左右に開く何本もの触角を備えた開口部が、白濁した液を滴らせながら蠢いていたが、その端には引き裂かれた人間の唇の残骸のようなものが見えた。

それは青白い雪の夕景を背にして、暗い灰色の脚を操芝居の人形のように動かして、近づいてくる。

私はファバーン剣を抜いた。太古の英雄が佩刀していた魔剣は、刀身に刻まれた神秘文字を緑に光らせ魔道の存在を示していた。この怪人の姿を見れば、一目瞭然ではあつたが。

怪人は、八本の手足を折り曲げ、今しも飛びかかってくるかのような姿をとった。だが、伸び上がるように八本脚を伸ばした時、飛んできたのはその身体ではなく、白い雪のようなものだった。

怪人の左右に開く口から発せられたそれは、雪のように白くとも、雪とはまったく異なるものだった。

異臭を放つ白く粘つくものが、降り掛かってきた。とつさに剣で払い除けたが、刀身に絡み付いたそれは、刻まれたファバーン文字に触れると嫌な臭いのする煙を上げた。

蜘蛛男は口元の触手をもぞもぞと蠢かし、幾つもある赤い目玉を



てんでにぐりぐりと動かした。だが、二つある人間の目は（本来あるべき場所とは異なるところに）私に視線を据えて、次なる攻撃の機をうかがっていた。

怪物は脚を折り曲げ、再び粘つくものを吐いた。私は横に飛んで避けたが、左足の踝あたりに幾筋か白いものが絡み付いた。八本脚の男は素早く身体を振り、黒い剛毛の生えた「手」で糸を手繰り寄せた。私は抗う間もなく雪の上を引きずられ、怪人の間近に引き寄せられた。

奴の「手」はものをつかむようには出来ていなかった。だが、その内一本の先端は、黒光りして槍の穂先のように尖っていた。恐ろしい速さで、奴はそれを振り下ろした。

私は転げ回って、攻撃をかわした。逃れようとすると、巧みに糸を手繰り寄せ、休む間もなく次の攻撃を仕掛けてくる。

鋭い爪先が耳朶をかすめて、積もった雪の中に突き刺さった。雪を散らして転がって、どうにか立ち上がると、怪人は、石畳の割れ目にも突き刺さったのか、爪が雪から抜けずにもがいていた。

私は足首に絡み付いた粘つく糸をファバーン剣で断ち切った。刃では切れず、緑に光る古代文字を押し当てるようにすると、なんとか取り払うことができた。

蜘蛛男は爪を引き抜き、怒りのためか八本の脚を小刻みに動かし、歯ぎしりのようなぎりぎりという音を立てていた。横に開く歪んだ口から、濁った涎が滴り落ち、泡立つような奇怪な音も聞こえた。

私は間合いを取り、飛んでくる蜘蛛の糸に備えた。怪人は脚を曲げて身を沈め、口元の触角を激しく動かした。

一瞬の後、飛んできたのは、糸ではなかった。ファバーン剣が弾き飛ばしたのは、灰色の固い何かだった。それは、背後の一膳飯屋の薄い壁に突き刺さった。小指程の大きさの釘か杭のようなものが、白く粘つくものを滴らせていた。手裏剣の一種のようでもあったが、それは怪人の口中より発せられたのだった。滴る涎か蜘蛛の

糸かを、そのように固めて吹き矢のように吹くことが出来るらしい。

怪人の体内の仕組みを考えている暇はなかった。触角は、別の生き物のように蠢き、裂けた唇からは泡がこぼれ落ち、次の一手が来るのは目に見えていた。

私は雪を蹴散らし、怪物に駆け寄った。ファバーン剣の魔光が一足ごとにいや増す。後数歩のところまで奴が発した「吹き矢」を肩越しに避け、私は剣を振り下ろした。黒く光る爪が鉛色の刀身を受け止めた。爪は鋼のように固く、火花を散らして剣を跳ね返した。

奇怪な蜘蛛の爪と太古の魔剣は、二手、三手と噛み合い、夕闇に青い火花が飛んだ。先刻、爪がかすった耳朶が熱く、ひりひりと痛んだ。滑るように光る爪には、毒があるのかもしれない。

剣が槍のような「手」と鏢迫り合いになると、奴は鈎爪のついた第二、第三の「手」を私の脇腹に食い込ませようと、繰り出してきた。外套を引き裂かれたが、私は奴を突き放し、跳んで後退った。

怪人は私を追って跳躍した。鉛色の空に黒い異形の身体が舞い、さらに粘つく白いものが、網のようになって降ってくる。

私は、異臭を放つ蜘蛛の巣を避けながら、飛びかかってくる化物にファバーン剣を叩き付けた。

人を斬るのとはまるで逆の、固いものから柔らかいものへという奇怪な手応えがあり、生暖かい飛沫が飛び散った。

剛毛の生えた棒のような「手」が二本、雪の上に落ち、濁った黄緑色の粘液を撒き散らしていた。

蜘蛛の怪物は、残った左側の二本の「手」を狂ったように振り回し、人の目も蟲の目も憎悪にぎらつかせ、突進してくる。涎を滴らせた口から、灰白色の「吹き矢」が一本、二本、続けて飛び出す。

一本目は剣で打ち払ったが、二本目は左肩に突き刺さった。鋭い痛みが走る。

奴は槍のような爪を振りかざし、襲いかかってきた。少しばかり均衡を崩したのは、二本の「手」を失ったせいだろうか。

私は迫る槍の「手」をかわして、奴の脇腹にファバーン剣を叩き込んだ。斬ったというより、何かが潰れたような嫌な手応えがあった。

蜘蛛男は腹から黄緑色の汚液を噴き出して、路上に転がった。粘つく体液が白い雪を汚し、六本になった脚がそれを飛び散らせた。

私は剣先を奴の喉元に突きつけた。

「貴様の主は、ナルカージェという魔道士か」

怪人は、真紅の目玉を気味悪く蠢かし、歪んだ口元から、濁った泡を噴き出した。

「貴様はナルカージェの手の者か。マツアオン・グランゾからやって来たのか」

マツアオン・グランゾという言葉聞いた時に、奴の二つの人間の目が、何か意味のある動きをしたように見えた。だが、裂けた口から出て来たのは、呪詛のように聞こえるしゅうしゅうという声と、汚らしい涎だけだった。

私は剣を奴の人間の目の片方に突きつけた。

「人語を喋れぬわけではないだろう。答えんとあつては、貴様の人間の部分を抉りつつっていくだけだ」

私は人間の目の縁に突きつけた剣先に力を入れた。そこからは、赤い人間らしい血の滴が噴き出した。怪人は残っていた「手」を弱々しくあげ、待つてくれとでも言いたげな仕草を示した。

「ナルカージェはどこにいる？ 將軍の人面花を盗んだのは、貴様か！」

蜘蛛男は口元をもぞもぞと動かした。裂けた人間の唇の痕跡が震えて動き、何かを喋ろうとしているかに見えた。

だが、奴の口から飛び出したのは、人間の言葉でも、奇怪なしゅうしゅうという音でもなかった。黄緑の血が混じった白濁した粘液とも糸ともとれるものが、私の顔面目がけて吐き出された。

仰け反って避けて、顔にその汚液を被るのは免れたが、左肩にそ

の吐瀉物のようなものは降りかかった。外套と厚手の襯衣を通して、その不快な粘つく感触が伝わってくるかのようだった。

私が均衡を崩して倒れるのと同時に、蜘蛛男は立ち上がった。腹の傷からは、腐った野菜汁のような緑色の粘つく液がだらだらと滴り落ちている。剛毛に覆われた脚は、異様にわななき、壊れた操り人形のような不自然な動きをしている。

奴は瀕死の様子に見えたが、それでも、真紅の目、特に二つの人間の目からは、憎しみと怒りの光芒が放たれ、私の胸元に突き刺さらんばかりだった。

怪人は四本の「足」で跳んだ。私はファバーン剣を突き上げた。

鼻先で細かな鋸状になった奴の爪が震えていた。太古の魔剣は奴の胸を串刺しにし、黒光りする爪はそれ以上私に近づくことは出来なかった。

剣が突き刺さった奴の腹からは、白い嫌な臭いのする煙が上がって、黄緑色の体液と黒ずんだ赤い血が刀身を伝って流れ出している。目の前にある魔物の口からは灰白色の粘つくものが滴っている。幾つもの赤い目玉は動きを止め、二つの人間の目からも光が失われつつあった。

私は奴の身体を押しつけ、立ち上がった。仰向けに転がった蜘蛛男の身体に足をかけ、剣を引き抜くと、残った六本の脚が痙攣し、横に開く口からは白濁した粘液が、腹の傷口からは黄緑色の体液が噴き出した。どちらにも、濁った赤い血が混じっていた。

ヨーコック新聞商会の「真実をあなたに」という色褪せた看板は、雪に覆われ凍りつき、半ば見えなくなっていた。サンジェリイには珍しい大雪が看板の裏側の真実を浮かび上がらせてくれたのだ

ろう。

火鉢で赤くなつた手を暖めていた売り子の少年は、私の風体を見ていささか不安を感じたようだったが、二階の執筆室にいる主へ取り次いでくれた。店の奥では、新発明とやらの印刷機械が喧しく音を立てている。

軋む階段を上つて部屋の扉を開けると、自称「真実の使徒」は、無数の覚え書きが散らばつた大きな机に向かい、ペンを走らせていた。

「モジラフ子爵、大怪我をなさる。雪の朝に御帰宅の途中に！如何なる御用向きの途上か？」

ヨーコックは、ずり落ちそうな丸眼鏡を押し上げて、得意気に原稿の見出しを読み上げた。

「どうだ、ランケン。三年ぶりの大雪だ、なんてことを書いても、おもしろくも何ともない。窓から外を見ればわかることだからな。だが、大雪の早朝に自分の屋敷の閉まつている裏門から入ろうとして足を折つた貴族のことなら、みんな読みたがる。モジラフ子爵様は、またしても踊子狂いの病が出たのか、はたまた、キムシリア書記官追い落としをめぐる陰謀に加担しているのか？真実をあなたに！」

この前会つたときよりも、額が広くなつたような気がするのは、相変わらず、真実の探求と印刷機械の改良に寝る間も惜しんでいるからなのだろう。

「今日はトリプロ街に行つてみたが、新しい媚薬の話や謀殺用の秘薬が売れたという話は聞かなかつたな」

ヨーコックは顔を上げ、私の姿を繁々と見た。分厚い硝子の底の丸い小さな目を見開き、やれやれという様子で何度もうなずいた。

「なるほど、そんな在り来たりの話をしている暇はなかつたようだな。だが、その外套にこびりついているものは何だ？悪魔に淫水でも引つ掛けられたか？」

私は改めて左肩あたりをべつとりと覆っている糸を引く白濁した

粘液を見遣つた。確かに、精水の類と見えなくもない。

「奴は口からこれを吐いた。せめて悪魔の涎だと言つてくれ」

新聞屋は嫌悪と心配の入り交じつた渋面でうなずいた。

「奴……奴ね。いろんな奴がいる。特に御前さんの相手には」

私は肩をすくめようとしたが、奴の「吹き矢」が刺さつた傷口が痛み、渋面を作ることとなつた。

「今、薬と酒を持つてこさせよう。で、どんな奴だつたんだ、そんなにたつぷりと唾を吐いた奴つてのは」

「うんと腹が空いてたんだらうね」

ヨーコックは今度はあきれた顔でうなずき、大声で下働きの女を呼んだ。

酒で傷口を拭うとひりひりと痛んだが、今のところ毒に侵されている気配はなかつた。包帯をして服を着たが、爪で裂かれ、血と粘液がこびりついた外套は古着屋に売ることも難しそうだった。

傷を洗つたデイコンは酸味のある安物だったが、呷ると少しばかりまともな気分になつた。酒としての効能には問題はない。

「金蹄隊がナクシャツツに行つた話を知っているかい」

新聞屋は茶渋で黄色くなつた自分の陶器の碗にもデイコンを注ぎ、一口飲んだ。茶碗に冷めたマッシュウ茶が残っていたことを毒づいてから、私の質問に答えた。

「我が友は、またしてもサンジェリーの禁忌に触れる事件に首を突っ込んでいるというわけか。国王直属の精鋭部隊が、密林王国で消息を絶つた事件は、無論、公にはなっていないが、サンジェリーの路地裏に詳しい者なら何処かしらで聞いたことのあるはずの話だ。ランケン、御前は知らなかつたのか？シユヌベル大学とも関わり深い一件だぞ」

「旅行中のとき。帰ってきてからは、なるべく御偉い連中とは関わりを持たないようにしてきたしね」

「そうか、御前さんが大学を飛び出して、世界放浪と洒落込んでいる間の出来事か。だから初耳なんだろうな」

もしかすると、酒場の噂話として耳に入ったことはあるのかもしれない。だが、私は王宮にも軍隊にも大学にも興味はなかった。

「金蹄隊は、いや、そのナクシャツ探検隊は全滅したと聞いた。そうなのか？」

「ああ、そうさ。ただ一人、金蹄隊を統べる將軍が廢人のようになつて帰つて来た。確かスターミネイドとかいう名前だ。將軍は勞いの金をもらつて隠居した。噂では、ナクシャツの密林が恋しくて、途方もない大温室を作つて、その中で暮らしているらしい。脚萎えになつただけでなく、こちらもおかしいという話だ」

ヨーコックは、こめかみのあたりを指で突ついた。

「他に知っていることは？」

新聞屋は、茶碗に残つていたマシウ茶混じりの酒を勿体ぶつた仕草で飲み干した。

「探偵なんてやくざな稼業は止めて、警邏隊にでも入つたらどうだ。よつほど、似合つてる、いや、そうでもないか。もう一人、密林王国から帰つて来た者があるという噂はある。いいか、噂だ。誰も確かなことは知らない。シュヌベル大学の教授だ。名前は……名前は……ジャーネイクだ。三年ばかり前にジャーネイク教授が帰つて来たという噂が立つたことがある。探検隊が全滅して十年以上たつというのに！これは記事になる、書こうかと思つたが、噂以上のことはわからなかつた。それだけだ。それ以上のことは知らない」

「噂の出所は？書くつもりだつたんだらう」

ヨーコックは碗を置いて、ペンを手に取ると、苛立つたような仕草で机の上の紙をつついた。ペンを小刻みに振りながら、窓の外を眺める振りをした。デリン灯の薄緑の光の中、また降り出した雪が青白く見えた。

「邪魔が入つた。調べを進めていると、王宮付き特等書記官だという男がやつてきた。ロストナムと名乗つていたな。これ以上ナクシャツでの一件について嗅ぎ回るのは止めると言つて、机の上に使ひ込んだ短剣と金貨の入つた袋を置いた」

ヨーコックはペン先を机の上に突き立てた。

「どちらかを取れとな。短剣の方を選んだ場合は、そいつは直に俺の胸板に差し込んでくれるらしかつた。で、俺は金貨を取つて、印刷機械の改良に役立てたというわけだ」

長年の付き合いで、この男が表の看板の謳い文句について、結構まじめに考えていることは知つていた。あまり話したい一件ではないだろう。だが、私にはまだ聞くことがあつた。

「で、どこまで調べは進んでいたんだい」

「いいか、ランケン、印刷機械というのはな、恐ろしく金がかかるものなんだ……いや、この商売というのはな……」

新聞屋の主は言い訳を途中で止めにして、机に突き刺したペンを引き抜いた。墨壺に先を浸すと手近な紙に何か認めた。

「真実をあなたに、だ」

ヨーコックはそう言つたため息をつき、私に紙を差し出した。

私は礼を言つてその紙を受け取つた。

「特等書記官だと名乗る男は、どう見てもペンを持つ人間には見えなかつた。貧相な体つきの小男なんだがな……」

私は粘つく液が付き異臭を放つ外套を羽織りながら、尋ねた。

「どんな人間に見えた？」

「人殺しだよ、ランケン。あの何処も見えないような濁つた目は、何人、人を殺しても、何も感じない目さ」

クーリカフ街の家に辿り着く頃には、汚れた外套は雪で真っ白になつていたが、異様な臭いはますます鼻を突き、耐え難いものになつていた。私は外套をごみ箱に放り込み、暖炉に火を入れ、着替えた。

凍りついたように寒い台所から干涸びた乾酪と麵麩、干し肉を探し出し、黒檀の机に置いた。引き出しから古鴉印のアイコンの瓶を取り出し、青硝子の酒杯にいっぱい注いだ。琥珀色の酒は、暖炉の火よりも速く、私を暖めてくれた。

ヨーコックがくれた紙片を取り出し、暖炉の明かりにかざしてみ

た。ひどい悪筆だったが、誠実な真実が書かれているはずだった。酒を飲んで血の巡りが良くなつたせいも、左肩の傷が疼き出した。私は蛇革のヤムラスの助言も思い出し、もう一杯ディコンをおつた。

それから「クーリカフ街の探偵スナブ・ランケンが友人に恵まれている」と声に出して言ってみた。(多分)二、三回言ってみた後、睡魔が襲ってきた。

私は冷たい寝床に転がり込んで、泥のように眠った。

5

雪はやみ、薄曇りの空からは弱い日差しも差していたが、ひどく寒いことに違いはなかった。

私はスターミネイド將軍の執事が手渡してくれた手付けの金を使って、新しい外套を買った。幾らか厚手で寒さを防ぐには良い物だったが、短刀型の手裏剣をうまく入れられる隠しがない。後で知り合いの仕立て屋に頼むしかないだろう。

まだ生きのいい、ぴんとした襟を立てて、私はヨーコックがくれた紙片に書かれた場所に向かった。

シュヌベル大学の北側には静かな屋敷町が広がり、教授連の邸宅が幾つも並んでいる。学生達は主に大学の敷地内にある学寮か、南の放校通りあたりにある下宿屋住まいだ。

私がシュヌベル大学に籍を置いていた頃は、幸か不幸か北側の屋敷町にはあまり縁はなかった。幾度か訪れたことはあるが、こうして白い雪に覆われた端正な石塀の続く路を歩いていると、初めて訪れる美しい町のように思えた。

ジャーネイク教授の屋敷は、黄色い漆喰の壁に雪の合間から見える緑色の瓦屋根が美しい家だった。こぢんまりした庭には、サン

ジェリイには珍しい南の国の木々が、先の尖った細長い枯れ葉に白い雪を積もらせていた。

仮漆の剥げた扉を開けて出てきたのは、くすんだ顔色をした中年の女だった。艶のない波打つ黒髪を後ろで束ね、少ししわの寄った薄い頬が黒い瞳に覆い被さっていた。頬に少しばかり雀斑があった。地味な薄茶色の服を着ていた。

「何方様でしょうか」

「スナブ・ランケンと言います。父がシュヌベル大学で、ジャーネイク教授にお世話になったことがあります」

私の名前以外は出鱈目だった。父が変わり者で知られた学者だったことは事実だが、ジャーネイク教授と知り合いだったかは、知らない。

「何の御用でしょうか。父は疾うの昔に亡くなりましたが……」

ジャーネイク教授の娘は不審気に、私の顔を見た。私は驚いたような顔をして、次の台詞を続けた。

「そうですね。エスカールから帰ってきた父が、もう一度旧友に会いたいと言って、体の自由が利かないものですから、私を使わしたのですが……お亡くなりになっていようとは……ナクシャツからはお帰りになったと聞いていたのですが」

ナクシャツという言葉を聞くと、女の顔色は、黄ばんだ古い紙のようになつた。

「父はナクシャツに行つたまま帰らなかったのです。どこでそんな話を……」

女は眉間にしわを寄せ、気色ばんだ。

「父は新聞で読んだと言っていました」

女は存外に素早く、玄関の扉を閉めようとした。私は杵先を押し込み、肩をねじ入れた。女が扉を閉めようとする手に力を入れるのと、昨日の傷口がずきりと痛んだ。

「あなたは誰ですか？父の知り合いだというのは嘘でしょう。新聞屋の人ですか？何もお話しすることはありません」

私は痛みをこらえて、肩をもう少し、扉の隙間に押し込んだ。女は苦痛に歪んだ私の表情に怯んだか、扉から手を放し後退った。

くすんだ青緑色と黄褐色でまとめられた家の中はきれいに片付いていたが、冷え冷えとしていた。暖炉にはちよろちよろと火が燃えていたが、近くに手をかざさなければその温もりを感じるのには難しそうだった。

「あなたは誰です？」

ジャーネイク教授の娘はもう一度同じことを言った。

「スナブ・ランケン、クーリカフ街で探偵局を開いています。人捜し、物捜し、その他諸々面倒ごとを引き受けています」

「誰かに死んだ父を捜せと頼まれたとでも言うの？それともあの新聞屋が、命を賭してでも、看板の謳い文句通りに生きる気になったとでも言うの？」

女は眉間のしわを深くし、色のない唇を突き出すようにして、きつい口調で私を問い詰めた。

「どちらでもありませんよ……御名前をお聞きしてもよろしいですか？」

「マージナス、マージナス・ジャーネイクよ」

「では、マージナスさん、僕の今の仕事は盗まれたある物を取り戻すことです。あなたの御父様を捜しているわけではない。ただ、この一件には、ジャーネイク教授も関わりがあるようなので、お話を伺おうと思つたのです」

「どんな関わりがあると言うの？」

女の薄い瞼は見開かれ、黒い瞳には光が宿っていた。

「盗まれた物というのは、教授が参加したタクシヤツツ探検に関わりがあるのです。教授が三年前にタクシヤツツから帰ってきたという噂は本当ですか」

「誰に聞いた噂なの？新聞には載らなかつたはずよ」

「無数の記事が今日も没になっています。没になつても屑籠に捨てられなかつたものもあるでしょう」

「あなたは、あの新聞屋よりも少しは性根というものがあるの？」

マージナス・ジャーネイクは、私を詰問し続けた。地味な見かけとはいささか異なつた性格の持ち主のようだった。

「たいいていの新聞屋よりは、多分。中には私と同じくらい性根が据わつていて、特等書記官の御慈悲も無視して、ここを教えてくださいのような奴もいます」

特等書記官という言葉を聞くと、マージナスの薄い瞼にまたしわが寄り、黒い瞳に暗い影が過つた。

「あなた、お酒は飲めるの？」

「仕事中は、控えめにしています」

ジャーネイク教授の娘は、奥の戸口に姿を消し、しばらくして小さな丸盆に陶器の酒杯を二つ、薄青い酒瓶を乗せて現れた。

「座つて」

暖炉の前の椅子を勧めてくれたので、私は有り難く従うことにした。女が小卓の上に置いた酒杯は掌に収まる程の大きさで、髑髏の意匠が施されていた。青い酒瓶共々サンジェリーの物ではないようだった。女は木栓を抜き、蜂蜜色の酒を注いだ。

「ブゴムよ。密林の酒、サンジェリーではあまり手に入らないわ」

この仕事を終えるまでには、ブゴムを一樽くらい飲まなければならぬのかもしれない。黄色い花びらは入っていないかつた。マージナスは一息で小さな酒杯を空け、私にも空けるように目顔で促した。ブゴムはスターミネイド邸で飲んだものほど、まろやかではなく、香りがぎつかつた。

「私の仕事を引き受けてくれるなら、父に関する事を話してもいいわ」

女はそう言いながら、酒瓶から次の一杯を自分の杯に注いだ。

「仕事というのは？」

彼女は、酒杯を掌の中で回してみたり、匂いを嗅いでみたりした。それから、ちゃんと瞼を開いて私の顔を黒い瞳で見つめ、言った。

「父を捜し出してほしいの」

私は半分程残っていた酒を飲み干し、杯を置いた。女は無造作に杯を満たした。どうやらブゴムは一樽では済みそうもなかった。

「一日四十ダズン、他に必要な掛りを頂きます」

「では、引き受けてくれるのね」

「あなたが必要な事を話してくれるのなら」

ジャーネイク教授の娘はうなずき、立ち上がった。私は彼女の後に従った。

中庭に面した通廊は、雪明かりを受けて明るく、この家にある悲劇の匂いをかき消しているかのようだった。

ジャーネイク教授の書斎は書庫も兼ねており、小ぶりの図書館といった趣だった。三方を天井まで届く書棚で覆われており、南に向いた窓の前に大きな机が置かれていた。机の上は何本かのペン、硝子の墨壺、覚え書の帳面などがきれいに並べられていた。窓からは雪に覆われた南方の木々が見えた。

「ここに父は帰ってきたのよ」

「帰ってきた？本当に御父様がナクシャツツから帰ってきた、そう思われるのですね」

「あの夜、黒い影はこの部屋から、ある種の本だけを持ち去ったの」

マージナスは部屋の奥の書棚の一角を示した。作り付けになっている書棚の下の方、その部分だけに扉がついていた。縦横二メートル（約六十センチ）程の観音開きの頑丈そうな扉には鍵穴があった。

彼女は、一度別室に消えると、真鍮の鍵を持ってきた。しゃがみ込んで鍵を開けた。

扉の中はがらんだようだった。微かに黴臭いような、何かが腐ったかのような臭いがした。

「ここには、父の秘蔵の稀観書が収められていたのよ」

教授の娘はその先を言い淀むように、言葉を切った。私は黙って彼女が口を開くのを待った。春本を隠し持っていたのではあるま

い。

「父はここに魔道書を何冊か収めていたの」

私はうなずき、さり気なくファバーン剣の柄頭に触れてみた。この場所で妖術が執り行われていた様子はないようだったが、この剣の力はいつも当てになるわけではない。

「どんな本です？」

「……南の国々の奇妙な信仰や、呪術、妖術に関する本。『緑鱗綺譚』とか『マツァオン・グランズ秘伝』とか『百花樹呪法』とか、そういう名前を覚えてるわ」

いずれも聞いたことのない書物だった。

「お詳しいんですね」

「父の蔵書の目録を作る手伝いをしたことがあるの。父は端から妖術の研究をしていたわけではないけれど、ナクシャツツの密林王国やチャワピスコウの遺物を調べているうちに、こうした書物と出会ったらしいわ」

「どんな事が書かれていたのか、知っていますか」

マージナスは首を振り、暗い目で空っぽの書棚を見つめた。

「何も知らないけれど、何かとても恐ろしい事よ」

「黒い影がここにあった本を持ち去ったと言いましたが、それが御父様だということですか？」

彼女は部屋の暗い隅を見ながらうなずき、その夜のことを語った。

「三年前のことだったわ。ひどい嵐の夜よ。私は寝付けず、奥の部屋でブゴムを一杯飲んでいた」

そう語る彼女の手は、見えない酒杯を持つかのような手つきだった。

「風の音や雷の音とは違う音が聞こえた気がして、書斎の扉を開けたの」

「あなた一人だったのですか」

彼女は少しだけむっとしたようにも見えたが、話を続けた。

「そうよ。この家に住んでいるのは私一人よ。慈悲深いエイマン王が賜ってくれる金貨では、住み込みの使用人を雇う余裕はないわ。昼は通いの人を雇っているけど、夜は一人よ」

私はただうなずき、話の続きを待った。

「その窓が（と言って彼女は南向きの窓を指し示した）開いていて、雨が吹き込んでいたわ。鍵は閉めておいたはずだと思っただけで、とにかく窓を閉めたわ。そのとき、稲妻が光って、父の机の上に泥だらけの足跡がついているのが見えたの」

彼女は、今はきれいに磨かれている机の上に、その時の足跡の輪郭をなぞるように指を這わせた。

「持ってきた蝋燭は風で消えてしまっていたわ。私は部屋の中の暗闇に目を凝らした。また、稲妻が光って、その、その、部屋の隅に見えたのよ」

「御父様が、ジャーネイク教授がそこにいたのですか」

マージナスは激しく首を振り、両の手をきつく握って口の当たり

に当てて、泣きそうな少女のような表情になった。  
「びしょ濡れの黒い影が、本を、御父様の本を引っ張り出していたわ。黒い、黒い影よ、稲光が何度も何度も光ったけど、黒い影のままなのよ。そう、黒い深い頭巾を被っていたわ、でも、顔は見えていたのよ、でも、黒い影にしか見えなかったの！」

私は泣き崩れそうになる彼女を抱き抱えた。女の匂いをかき消すようなブゴムの匂いがした。私は彼女を天鵞絨張りの椅子に座らせた。

「その黒い影は本当に御父様だったのですか」

しばらく、庭に積もった雪の様子を見てから、私は尋ねた。

「その書庫の鍵は父と私しか持っていないわ。父はいつも鍵を首から下げていたわ。ナクシャッツへ行く前に、もし、父の身に何かあった時は、私が鍵を開けて中の書物を処分するように言われて、もう一つの鍵を渡されたの。でも、私は父が死んだと信じたくなって、ずっとそのままにしていたのよ。翌朝、書庫の前には、父が

持っていた鍵が落ちていたわ」

「誰かが御父様の鍵を奪って、盗みに入ったとも考えられる」

「私はあの夜、雷光の中で、黒い影の目を見たのよ。真つ黒い影にしか見えない顔の中で、目だけが光って見えたわ。あの目は、あの目は確かに父の目だったわ！」

しばらくして気を落ち着けたマージナスから、私はもう少し「あの夜」の事を聞き出して、ジャーネイク邸を辞去した。

黒い影は彼女の悲鳴を聞いて、まるで恐れ戦いたかのように、奇書をかき抱いて窓から姿を消した。気を失った彼女が、翌朝見出したものは、ジャーネイク教授が持っていたはずの鍵と、床や机の上に残った、異様な緑色がかった泥とも体液ともつかない粘ついたものだった。

ジャーネイク教授がどんな目をしていたのかと聞くと、彼女は「私と同じ黒い目よ」と言った。他の特徴はないようだったが、それでも父親の目だと彼女は確信していた。

出入りしていたおしゃべりな女中から、侵入者の話は広がったらしい。やがて、ヨーコック新聞商会から来たという男が、根掘り葉掘り話を聞き出そうとした。

彼女は父親が生きているかもしれないという一縷の望みを託して、知っている事を話したが、それが記事になる事はなかった。

しばらくすると王宮付き特等書記官ロストナムと名乗る男が訪ねてきた。

「その小男はこう言ったわ。『奥様、残念ながら、ジャーネイク教授が亡くなったというのは確かな事です。これ以上あれこれ詮索しても、何も得られるものはありません。慈悲深い国王陛下は、奥様の悲嘆如何許りかと慮り、またジャーネイク教授の考古の学問への、命を賭した計り知れない功績を鑑み、ここに新たな恩給を賜われることをお定めになりました』まったく、何の感情も交えず、その小男はそう言ったのよ」

そう語る彼女の表情からは、押し殺した怒りと屈辱が滲み出てい



るようだった。特等書記官はかなりの金貨が入った袋を置いて帰った。懐から袋を出したとき、のぞいた短剣の柄頭は、儀礼刀というには、ずいぶんと使い込まれたもののように見えたと言う。

「あの男は、わざと短剣を見せたのよ。そうに違いないわ」

ロストナムという男は、何も脅し文句を言ったわけではなかったが、彼女は底知れない恐ろしさを感じたと言った。

女中は青ざめた顔で暇乞いを言い出し、新聞屋からは何の連絡もなくなった。彼女は漠とした期待と不安を胸の底に沈潜させたまま、今日まで生きてきた。

「父の身に何があったのか、私は本当の事が知りたいのよ。今も生きているのなら、どんな姿になっていようとも、会いたいわ」

別れ際にそう言ったマージナスの頬に幾許かの赤みが差しているのは、あおったブゴムのせいばかりではないようだった。

## 6

ジャーネイク邸からラグラン大通りに戻る頃には、灰色の雲の向こうに陽は落ち、薄緑のデリン灯の明かりと店々の橙や赤、青の灯明が、雪道を彩っていた。

路行く人は普段よりは少ないようだったが、それでもメルカー西岸最大の都の大路には数多の人々が行き交っていた。

つけられていると感じたのは、宿酔横丁へ入ろうかというあたりだった。『アトスの店』の前を通り過ぎ、『銀鱗亭』もやり過ぎし、『割れ兜』の扉を押し開けた。店主が元兵士で、下っ端の雇われ衛士や傭兵崩れが集まる店だった。

まだ宵の口のせいとか、雪のせいとか、店は空いていた。私は止まり木に座り、シエアと何か暖かいものをと、髭面の主に言った。主人の額には大きな傷痕がある。ハリルの戦いの時に兜が割れる程の一

撃を受けて負った傷だと、彼は言っていた。真偽の程は誰も知らない。

泡立った飲み物と湯気の立つ煮込みが前に置かれた時、背後で静かに扉が開く音がした。

入ってきた男は止まり木の反対側の端に腰を掛けた。黒い外套に黒い鍔の垂れ下がった帽子を被っている。顔はよく見えない。男は低い声でシエアを注文した。

「主、金蹄隊という部隊の事を知っているかね」

私は、煮込みをつつきながら訊いた。厳つい顔の主人は陶器の酒杯を拭きながら答えた。

「そりゃあ知ってますよ。王宮直属の選りすぐりの奴らですからね。まあ、私のような雑兵にはとんと縁のない連中でしたがな」

「ナクシャツツの大密林に行つて、全滅したつて話を聞いたが」

亭主は口調も表情も変えずに、次の酒杯を磨きながら、答えた。

「そうですね。どんな御立派な軍隊でも、疫病の神には勝てないつてことですな」

下級兵士の間では、金蹄隊の全滅の訳は、そういうことになっているらしい。

黒尽くめの男は、絡繰り人形のように、シエアの杯を口に運んでいたが、黄金色の酒が彼の胃袋に収まっているのかは、疑わしかった。

「生き残りは誰もいないのかい」

私は懐から銅貨を一枚出して、静かに彼の方へ押しやった。主は太くて短い指を素早く動かし銅貨を回収し、少しだけ声を低めて答えた。

「大将がね、帰ってきましたよ、たった一人ですね」

彼の口調には少しだけ意地の悪い冷笑が含まれていた。

「でもね、熱病で少しばかりいかれちまつて話ですがね。流行病で駄目になったルファンス街に硝子張りのつかい屋敷を建て、中にはナクシャツツの密林を作つて話ですよ」

少しばかりスターミネイド將軍とその大温室について話を続けたが、私が見聞きした以上に、彼が知っていることはない様子だった。それから、懐に意味ありげに手を入れて、次の話題を提供した。

「もう一人、ナクシャッツから帰ってきたという噂を聞いたことがある。シュヌベル大学の教授だつて話さ。御亭主も知ってるかい」

『割れ兜』の主は、最初はそんな人間はいないと言ひ張り、私が懐から銅貨を出すと少しばかり主張を変えた。それから、クオール四世の横顔が刻まれた銀貨を、私が指の間に挟むと、だいぶ考えを変えた。

「そうですね、旦那。そういう噂が流れた時もあったような気がしますよ。確かねえ、シュヌベル大学のねえ……」

銀貨を机の上に滑らせると、彼の口も滑りが良くなった。「そう、そうですね、ジャーネイクとかいう名前でしたよ。ええ、確かにそうでしたよ、ジャーネイク教授がナクシャッツから家に帰ってきたつて話がありましたよ。でもね、旦那、確かあれは幽霊だつたつて話ですよ。少しいかれた行かず後家の娘がそういう幽霊を見たつて話もありますよ」

私は奇術師のように、銅貨や銀貨を懐から出し入れしてみたが、主はさして事情通というわけではなく、それ以上の話は知らないようだった。体が温まり、空腹も程よく治まったので、私は満足し店を出た。通りしなに横目で見ると、黒尽くめの男のシエアは少しも減つていなかった。

背後でもう一度扉が開く音を聞いて、私は通りの奥に足を進めた。宿酔横丁の奥は鍵形に曲がつた見通しの悪い四辻になっている。そこに二つの黒い影があった。居酒屋の主達が金を出し合つて点している篝火に照らされていたが、黒い外套の襟を立て、黒い鍔広の帽子を目深に被つた二人の顔は見えなかった。

背中から、微かに雪を踏む足音が聞こえてきた。私はファバーン

劍の柄に手を掛けたが、妖力の存在を示す痺れにも似た感触は伝わつてこなかった。

私はそのまま通りを辻の方まで歩いた。背後の男は、距離を保つて私の後を歩いてくる。辻に立つ二人の男が私の前に立ち塞がった。

「手を引け」

左側の男がこれ以上はいくらも単刀直入に切り出した。

「いいね、無駄口を叩かないのは、男の鏡だ。おまけに今日はひどく寒い。なるべくなら口を開きたくない気分だ」

右側の男が、もう一度同じ台詞を口にした。

「手を引け！」

私も調子を合わせることにした。

「いやだね」

二人の男は同時に劍を抜いたが、私の方が一瞬はやかった。左側の男の劍を握つた手の甲をファバーン劍の切つ先が切り裂き、男は鮮血を滴らせて劍を取り落とした。

右側の男が斬りかかってくるよりはやく、私は劍を落とした男を盾にするように左に回り込み、同時に雪の上から劍を拾い上げようとする男を袈裟懸けにした。血飛沫をあげて男は倒れ込む。

もう一人が雪上で身悶えする同輩を飛び越えて襲いかかってくる。電光のような素早さで繰り出される刃を、私は古代の魔劍で受け止めた。青白い火花が飛んだが、刀身の神秘文字は鉛色のままだった。

男は駒のように身を回しながら、驚くべき速さで次々と白刃を突き入れてくる。奴の短めの刀身は敵と間近で渡り合うのに都合がいい。私は必死で受け止め、かわし、じりじりと後退つた。新品の外套に二カ所ばかり、裂け目を作つてしまった。

ほんの少しだけ奴の動きが大きすぎた瞬間に、私はすぐ側に立っていた篝火を蹴倒した。火の粉を散らして、鉄の籠に入った何本もの松明が奴の方へ倒れ込む。

男は黒衣に包まれた体をのけぞらせて炎を避けたが、その時、足を雪で滑らせた。尻餅をつきそうになる男に私は斬りかかり、剣を握ったままの奴の手首が宙に飛んだ。

仰向けに倒れた男の喉元にファバーン剣を突きつけた。右手首から噴き出す血が雪を朱に染めていく。

「手早く済ませよう。誰の差し金だ。言わなければ、斬る」

帽子はすでに彼の頭からはなくなっていた。顔色の悪い頬のこけた顔の中で、血走った目だけが濁った光を放っている。上背はかなりあるので、例の特等書記官殿ではないようだった。

「言え！」

私が切っ先を力を入れるより一瞬早く、男は残った左手を素早く動かし、私に何かを投げつけた。

瞬時に雪つぶてであるとわからず、私は構えを緩めて左手で顔を覆った。

男は蛇のようにするりと私の下から抜け出し、雪上を転がりながら、また何かを投げつけた。咄嗟に上げた左腕に鋭い痛みが走った。

十字形の小さな手裏剣が腕に突き立っていた。刃先が襯衣の下の革の籠手を突き破っている。

飛んでくる二つ目、三つ目の手裏剣を打ち払いながら、私は奴に迫った。漆喰の落ちた土塀に奴を追いつめた。

「新品の外套が台無しだ。勘定書はどこに回したらいいんだ。特等書記官殿宛か？」

男は苦痛に脂汗を流していたが、私の言葉に表情を変えはしなかった。職人気質なのだろう。私は奴の首筋に押し当てた剣に少し力を入れた。

「この剣は魔剣だ。三千年前に海中に没した国の悪霊が宿っている。神秘文字が見えるだろう。御前の魂を吸い取って地獄の第七層まで送り届ける呪文だ」

奴の目がわずかに動いたのは、刀身のファバーン文字を見るため

ではなかった。私の肩越しにどこかを見た。

私は咄嗟に身を沈めた。唸りを上げて何かが頭上をかすめた。蛙の鳴き声のような声があった。男の胸板には黒塗りの柄の短剣が突き刺さっていた。

振り返ると、ようやく増え始めた宿酔横丁の人だかりの中に、黒尽くめの小男が消えていくのが見えた。

## 7

翌朝は左肩の痛みで目が覚めた。傷口は昨夜の腕の傷の方が深いくらいだったが、蜘蛛男の唾液の矢で刺された左肩の傷は、紫色に腫れて、小さな傷口は白っぽくうじゃじゃけていた。デイコンを染み込ませた布で拭くと、嫌な痛みが走った。

乾酪と麵麴、干し肉を酸っぱい葡萄酒で流し込み、さらにデイコンを一口あおると、痛みはさほど気にならなくなった。私は裂け目のある外套を羽織って、ルフアンズ街に向かった。空は薄曇りで、相変わらず寒かった。

將軍の執事は、今日は最初から職業的な笑顔で迎えてくれた。

「これはこれは、ランケン様。新しい外套が良くお似合いですよ。御主人様は首を長くしてお待ちです。さ、さ、こちらへ」

「僕も昨日から会いたくしようがなかったよ」

私は外套の裂け目に指を突っ込んでみたかったが、あまりに子どもじみていると考え、やめておいた。

私の灰色の雇い主は、驚異の大温室の中で、先日会ったときと同じように、黒塗りの車椅子に座っていた。巨大な蒸気缶が低く音を立て、生き餌を食べるといふ植物の刺だらけの葉が、私の匂いを嗅ぎ付けたのか、ゆっくりと動いた。

「ランケン君、私のレルウエルは見つかったのかね」

スターミネイド將軍はブゴムの杯を手にして、性急に尋ねてきた。

「いや、まだです」

將軍は顔の裂け目のような口から、ふうと息を吐き出し、落胆の色を見せた。

「一番大事な時なのだ。開花の時にどんなことが起こるか、わからない。私のレルウエルに万が一のことがあつたら……」

灰色の老人は言葉を切つてブゴムをあおつた。万が一のことがあつたら、どうすると言うのだろうか。首でも括るつもりなのだろうか。

「何か少しでもわかつたことはないのか」

そう言う老人の口調には、命令を下すことに慣れきつた人間の傲慢さが滲み出ていた。

「シュヌベル大学のジャーネイク教授、それからロストナム、王宮付き特等書記官と名乗っているようですが、そういう人物に心当たりはありませんか」

脚萎えの男は表情を変えずに私の言葉を聞いた。それから、ブゴムをもう一口啜つた。彼自身の都合によつては、厳格で抜け目のない人間だつた昔が蘇るのだろうか。

「どちらも聞き覚えのない名前だ。一体、君は何の話をしているのだ」

將軍の灰色の目はますます色が薄くなり、石の彫物のように見えた。

「この外套を買う羽目になつた件と、この外套にこんな裂け目が出てきた件についてです」

私は蜘蛛男に襲われたことと、黒尽くめの男達に襲われたことをかいつまんで話した。ジャーネイク教授の娘の話はしなかつた。將軍は石のように硬い表情で聞いていた。

「ジャーネイク教授は、金蹄隊と一緒にナクシャッツに行つた。そこで何があつたんです？ロストナムという男は何者です？あなたは

知っているはずだ」

灰色の男は黙つていた。沈黙の中、青紫色の宝石のように輝く羽を持つ蝶が一匹、ひらひらと飛んできて、彼の酒杯にとまつた。乾いた灰色の瞳が、しばらく蝶を見ていた。

「いや、知らない。どちらも知らない名前だ」

蝶は箔片のような羽を煌めかせ、彼の酒杯を飛び立つた。そのまま、緑の中へ揺れながら消えていった。

「僕はこの事件を引き受けてから、二回も襲われて命を狙われた。一度目は化け物、二度目の相手はもつと質が悪い相手かもしれない。外套も二着駄目にした。あなたがそういう態度を取り続けるのなら、こんな危険な仕事を続ける気はない。もらつた金は返す。外套代を差つ引いてね。それで、將軍様とも化け物とも黒尽くめともおさらばだ」

スターミネイド將軍は石のように動かさず黙つていた。執事が何やらこちらに向かつて目配せをしていたが、私は無視して懐から金貨の入つた袋を出し、湿つた土の上に投げ捨てた。

踵を返して、そのまま大温室の出口まで歩いた。蒸気缶の音が激しくなり、蒸気を噴き出すしゅうしゅうという音が一際高くなつた。

誰かが私の破れた外套の裾を引っ張つていた。振り向くと、赤く、弱々しい濡れた目の老人が、灰色の手袋をした手で私の外套をつかんでいた。

「ランケン君、頼む、私のレルウエルを探し出してくれ」

スターミネイド將軍は石の彫像には出せない声でそう言つた。私たちは再び大温室の中央に戻つて、話を続けた。將軍はブゴムの杯を手にしていたが、口にはしなかつた。

「ジャーネイクはナクシャッツ探検隊の一人だ。もの静かだが、古きものへ懸ける熱情は誰よりも強い、そういう男だつた。私たちは、軍人と学者というまったく異なる人生を歩んでいたが、不思議と気があつた。道中、酒を酌み交わすこともしばしばだつた。

と気があつた。道中、酒を酌み交わすこともしばしばだつた。

「マツアオン・グランゾの廃墟の中で人面花を発見した時、ジャーネイクも一緒だった。彼も私同様、そこで見たものに魅入られてしまったのだ。私以上と言って良いのかもしれない。マツアオ・モルゴの襲撃が始まり、金蹄隊の勇士達が毒霧によって次々と倒れていく中、ジャーネイクは私の手から『種』を奪って逃げようとしたのだ。だが、彼の逃避行は一瞬で終わった。マツアオ・モルゴが放った毒矢が彼の首筋を貫いたからだ。毒の必要もないほどの致命傷だった。彼は『種』を抱きしめたまま死んだ。私は彼の手から『種』を取り返し、ここに持ち帰ったのだ」

「ジャーネイク教授は、確かにマツアオ・モルゴで死んだと？」

將軍は私の背後、「私のレルウェル」が植わっていたあたりに視線を向け、低い声で呟くように答えた。

「死んだとも。あれで死なない人間がいるわけがない」

「そうですか。僕はつきりジャーネイク教授が生きていて、覆面の魔道士としてこの御屋敷に入り込み、あなたのレルウェルを盗んでいったのかと思いましたがよ」

「そんなはずはない。ジャーネイクは確かに死んだ、死んだのだ！」

私の台詞は將軍の心中に、いささか不安の火種を掻き立てたのかもしれない。

「あなたもジャーネイク教授も魅入られてしまう、その花はそれ程までに魅惑的な代物なのです」

將軍は灰色の手袋におおわれた手でこめかみの辺りを押さえ、目を閉じて垂れた首を小さく振った。

「あの匂いだ。あの匂いが私を、おそらくジャーネイクも、捉えて放さないのだ」

「匂い？」

老人は顔を上げ、レルウェルが植わっていた場所を遠い目で見た。

「女の匂いだよ。それも初めて女性に思慕の念を抱いたときに感じ

た、女の匂いだ」

私は何と答えて良いかわからず、ただ黙ってうなずいた。ナクシャッツの面花は、十分に人生に於ける経験を積んだ軍人や学者を僅かの間に惑わせるような、媚薬のような匂いを発するのだろうか。

私は自分が初めて意識した女の匂いというものを思い出そうとしたが、うまくいかなかった。もう一つの質問を試みることにした。

「ロストナムという男は？」

彼は少しの間、答えなかった。ジャーネイク教授の件とはまた別に、口にしたくない理由があるらしかった。

「ロストナムという男は存在しない、いや、そう名乗る男はいるが」

「偽名だということですか」

將軍は、また少し黙っていた。

「そう名乗る男が、代々、王宮に害を為すことを葬り去ってきた。文字通り、葬ることもある、金で葬ることもある、やり方は様々だ」

「この一件は、その手の一件だと言うのです」

「そのように判断したのだろうか」

彼は虚ろな声で答えた。

「なぜ？」

「私がスターミネイド將軍だからだ。エイマン王直属の金蹄隊の將軍だからだ」

「誉れ高き金蹄隊のナクシャッツの一件について嗅ぎ回ることは、エイマン王は御許しにならない、ということですね」

今度の答えは、思いの他速かった。

「国王陛下は、そのようなことに一々裁可を下されない。ただ、そういう仕組みになっているのだ」

百通りもの反論が思い浮かんだが、ここで議論をしても、事が進

むとも思えなかった。

「ナルカージェという頭巾に仮面の魔道士、彼を雇った経緯を知りたい。トリプロ街でも、そんな魔道士を知っている者はいなかった。この前の執事の話でも、ある日訪ねてきた不思議な男を雇ったというだけで、ナルカージェの出自に関する話はなかった」

將軍は、執事の方を鋭い目で一瞥したが、執事は驚くべき完璧さで、その視線を無視した。この屋敷を追われても、勤め先には困らないだろう。

スターミネイド將軍は、もう一度執事に鷹のような視線を送ったが、彼は何も反応を示さなかった。

しばしの沈黙の後、渋々彼は口を開いた。

「沼地の魔女に予言を受けたのだ。ナルカージェという名の魔道士が「私のレルウェル」を開花させてくれると。占いの数日後に、その名の魔道士が訪ねてきた」

今度は、私の口が重くなつた。

「その魔女の名は？」

「アマアツサだ。沼の畔の薔薇色の館に住んでいる」

8

「沼地の魔女」を訪ねるまでには、数日を要した。

レルウェルとともに姿を消した庭師の家族や知り合いを訪ねたが、二人とも消息を絶つたままだった。トリプロ街やシユヌベル大学近辺で聞き込みもしたが、何も新しいことはわからなかった。

二日間で五回ほど、分厚い雲に切れ目ができ、陽が射したが、積もつた雪を溶かすほどのものではなかった。サンジェリイは寒く、夜になるとラグラン大通りは凍りつき、横転する馬車が何台も出た。

左肩の傷は、傷口そのものは小さくなっているようなのに、熱と痛みはいや増し、左肩全体が赤黒く腫れているようになってきた。左手は指先がしびれ、感覚が鈍くなっていた。

三日目の朝、寒い部屋で目覚めると、酷いことになっていた。窓が凍りついているのに、不快な汗を全身にかき目が覚めた。左腕は上げることができず、傷口のまわりはどす黒く変色していた。安酒を吹きかけたが、痛みすら感じなかった。頭はずきずき痛み、寢床から起き上がるだけでも息が切れた。

どうしてこんなことになってしまったんだろうと考えようとしたが、どうしてもうまく考えることができなかった。

辛うじて、とるべき道が一つであることはわかった。私はロウノドル門で馬を借りるべく、家を出た。

朝の冷気が少しだけ、気持ちをもともなものにしてくれた。

ロウノドル門の駅屋までは、後僅かだったが、私は近道をしようとして細い路地に入った。耳元で何かぱたぱたというような音がした。周囲を見回したが、凍りついた街路と石塀、鈍色の空があるだけだった。

何歩か歩むとまた音がした。さつきよりずっと大きな何かはためくような音だった。

もう一度あたりを見遣ると、鮮やかな色彩の何か、視界の隅ではためいたように感じた。熱に浮かされた頭が、とうとう幻を作り出したのかもしれない。

駅屋では、顔なじみの馬丁が私の顔を見て、困つたような顔をした。

「旦那、まるで棺桶から起き上がってきたみたいな顔色ですぜ」

「そういう奴と出会ったことがあるのか」

「しわがれた自分の声ではないような声が聞こえた。」

「え、いえ、そんなことは……」

「僕はあるよ」

馬丁は黙って馬を用意した。

私はエルトランゾ辺りまで行くらしい隊商を追い越し、馬を走らせた。道は大きく右に曲がっていくが、私は左側のあまり人の通らない細い道に入った。雪に覆われ、周囲の畑との区別がほとんどつかなかった。

次第に辺りは冬枯れた葦の原と凍りついた大小の沼が連なる風景となった。風は身を切るように冷たかったが、手綱を握る手は汗をかいてべとついていた。

また、ばたばたという音がした。頭の上を鮮やかな色合いの大きな布切れのようなものが、飛び越えた。馬が驚き、棹立ちになり、私は危うく落ちそうになった。

幻を見ているような気がしたが、そうではないようだった。巨大な蝶が極彩色の羽を動かし、宙を舞っていた。スターミネイド将軍の大温室から抜け出してきたかのような、赤、朱、黄に、緑や青も入り交じった目の覚めるような色合いの羽は、差し渡しが十メートル（約三メートル）はあるかに見えた。

凍りついた沼地の寒々しい景色の中で、その姿は、現世のものとは思えなかった。

蝶はただ大きいだけではなかった。美しい羽に挟まれた体は虫と人の異様に混じり合ったものだった。

頭全体の輪郭は人間のものに近かったが、巨大な虹色に光る目がその上半分を覆っていた。鼻梁がそのまま異様に伸びて渦巻き状の口吻となっているが、その下には、顎が後退した人間の口の名残のようなものが見える。

黒と黄灰色の斑模様の中には、肋のようなものが浮き出て忙しく上下している。細い腕の先には鉤爪状に変化しているが五本の指が見てとれた。

下半身は体節のある細長く膨らんだものになっていたが、脚は人間のものを不自然に引き延ばしたようで、よじれた筋肉に覆われていた。腕と脚の中間辺りの脇腹からは、一メートルほどの萎縮した異形の腕のようなものが生えていた。

奇怪な蝶人間は、雪に覆われた地面すれすれに体を浮かし、表情の読み取れない巨大な目で私を見た（のだろう）。それから、渦巻き状の口吻を延ばしたり縮めたりしたかと思うと、さつと舞い上がった。

私はファバーン剣を抜いた。妖魅の存在を示す痺れるような感覚は、熱のせいかわからなかった。刀身のファバーン文字が緑光を放っているのを見てとれた。

怪蝶の動きはさほど素早いようには見えなかったが、私の身体は思うようには動かなかった。羽を両断したかに思えたが、奴は刃をかわし、私の痛めた左肩を鉤爪で引き裂いた。血飛沫が飛び散ったが、痛みは感じなかった。私は雪の上に転げ落ちた。

立ち上がろうとすると、次の一撃が襲ってきた。辛うじて避けたが、外套にまた新しい裂け目が出てきた。右の二の腕に鋭い痛みが走る。

新しい痛みが、少し頭を体をはつきりさせてくれた。三度目の襲撃が来る前に、私は立ち上がり、太古の魔剣を構え直そうとした。

左腕がまったく動かなかった。ぐにやぐにやとした肉の塊がぶら下がっているようだった。

はたはたという静かな音とともに、鉛色の空から奴が舞い降りてきた。右腕一本で斬りつけたが、蝶人間はひらひらと嘲るような動きで、私の剣をかわした。

私は白刃を振り回し、何とか奴に一撃を加えようとしたが、いつも既のところまで剣先は届かなかった。

汗が滴り落ち、目が痛んだ。何か金色のちらちらと光るものが視界に現れた。蜘蛛男の毒が目まで回ってきたのかと思ったが、そうではなかった。羽ばたく巨大な蝶の羽から、金色に光る粉のようなものが、舞い落ちてくるのだ。

左手で口元を押さえようとしたが、まったく動かなかった。吸い込めば死を招くような気がしたが、金色の粉は不自然な渦を巻いて私を取り巻き、防ぐことは困難だった。

朦朧とするうち、何か甘く心地よい感じが、心の内に生じてきた。剣を振るう右腕も、感覚が鈍くなってきた。鋼の刃を放り出し、あの極彩色の美しい羽に包まれたい、そんな気分が芽生えてきた。和毛の生えた柔らかく暖かい毛布のようにそれは見えた。それに包まれれば、苦痛や寒さからすぐにでも解放されるような気がした。

私は辛うじて剣を下げたまま、ふらふらと蝶の怪人に近づいた。奴は地上近くに舞い降り、美しい羽を飛ばたかせている。金色の粉が静かな波のように私を取り囲んでいく。渦を巻いた奴の口吻がゆつくりと伸びて、蛇のように、蚯蚓のように、蠢くのが見えた。

その時、一陣の風が吹いた。刺すように冷たい氷の風が、金色の粉を吹き払った。私も蝶人も、同じようにはつとし、私は剣を握り直し、奴は私に向かっていた口吻を引き戻した。冷気とともに、激しい雪が降り始めた。空はたちまちの内に暗い銀鼠色になり、横殴りの雪が私たちを狙っているかのよう吹き荒れた。

息もできないような雪嵐に、私は咳き込み、喉から血と金色のものが混じった痰を吐き出した。倒れそうになる体をファバーン剣でやつと支えた。

蝶の怪人は、突然の雪嵐から逃れようと飛び立った。白い突風が鮮やかな羽を吹き飛ばし、奴は駒のようにくるくると空高く舞い上がった。風向きが変わり、今度は怪人は雪まみれになって地上に落下した。

引き裂かれ、真っ白に凍りついた羽を弱々しく奴は動かしたが、飛び上がることはできなかった。降りしきる雪が、もがく奴を白く染めていった。

やがて動きは止まり、大きな外套をまとったような、歪んだ雪像が完成した。

私も同じような姿だったが、一つ異なることがあった。私はまだ生きていた。

それからアマアッサの薔薇色の館にどうやって辿り着いたのかは、記憶が定かではない。

さほど遠くには行っていないかかった馬を見つけたときには雪は止み、雲の切れ間からかすかな光さえ差していた。馬の背に揺られているぼんやりとした記憶はあるが、あのときに自力で馬を駆ることができたのかは、はなはだ疑問だ。

ともあれ気がつくとは私は、なじみ深い女占い師の寢床に横たわり、天井の象牙色の精緻な浅浮き彫りを眺めていた。

「ランケン、あなたの人生はまだ続いているわ」

白い天井の中に黒い髪と深紫色の瞳の女が現れた。アマアッサは、天井と同じくらい白い顔を微かにほころばせた。

「君と天上界で結ばれたのかと思つたよ」

女占い師は、くすりと笑った。雪花石膏の像のように美しい顔に童女のような表情が宿り、私は単純に生きていて良かったと思つた。

私は低い寝台の上で身を起こした。薔薇色の木のようにも硝子のようにも見える不可思議な壁で囲まれた部屋は暖かく、金色の窓枠に嵌め込まれた窓硝子は、白く曇っていた。

包帯を巻かれた左肩の痛みに、私は呻いた。左腕全体に熱がこもり、疼き、自分の体ではないように感じられた。

「ランケン、人生を続けたいなら、寝てなくちゃ駄目よ」

君が側にいる人生ならそうしよう、と答えようとしたが、口から出てきたのは、「ああ」という一言だけだった。

アマアッサは優雅な仕草で、金色の盆に乗せた硝子の急須と白い艶のある茶碗を運んできた。彼女が淹れてくれた香しいマッシュウ茶を飲むと、体の奥から温かさや安堵感が広がった。部屋は明るく陽



の高い刻限らしかったが、睡魔がまた襲ってきた。彼女の淡い蔷薇色の唇は優しく微笑み、睡魔に抗う必要がないことを告げていた。

私はもう一度眠りについた。

次に目覚めたときも、部屋は明るく暖かかった。

「僕はどれくらい寝ていたんだい」

「まる二日よ」

寝床の傍らでアマアッサは静かな笑みを浮かべたまま答えた。彼女は消炭色のゆつたりとした長衣の上に、幾らか明るい色合いの灰色の毛織りの肩掛けを羽織っていた。何かとても暖かそうな感じがしたが、握った細い手は、いつものようにひんやりとしていた。私は彼女の手のその冷たさに、なぜか安堵を感じた。

左肩はまだ疼いていたが、耐え難いというほどではなく、左腕を動かすこともできた。

「危うく隻腕の探偵になるところだった。ありがとう」

「何を言ってるの、危うく死ぬところだったのよ」

私は黙ってうなずくしかなかった。

「こんな雪の中で、ナクシヤッツの毒蜘蛛や食人蝶とかかわりあっているなんて、酔狂にも程があるわ」

「そんな有り難い奴らとは知らなかったよ」

アマアッサはいささかうんざりしたような表情を見せた。そんな時、少しだけ目尻によるしわを、私は好ましく思っていた。

「肩の傷から回っていた毒は、ゲムサという毒蜘蛛のものだと思わ。何日かかけて、ゆつくり毒が体中に回って、腐りながら死んでゆくよ。ゲムサは程よく腐敗した体を食べるが好きなの」

「果物でも肉でも腐る寸前がうまいというからね」

「あなたはアルモス蝶の毒粉も吸い込んでいるわ。意識はあるのに体が動かなくなる。横たわった体に無数のアルモス蝶が集まって、すべての体液を吸い尽くすと言われているわ」

「なるほど、サンジェリイの雪の中では、滅多にできる死に様では

ないね。そんなにたくさん蝶はいなかったけれど。やけに大きいのが一匹だけだ」

彼女は私の台詞があまりお気に召さないようだった。

「ランケン、あなたがここに来たのは、その傷のためだけというわけではないでしょう」

「君と寝たかったからさ」という台詞が勝手に口から出そうになったが、前歯の裏辺りで止めることに成功した。

私はこの一件に関することをアマアッサに話した。隠し事をしていても、大抵のことは遠からずわかってしまうのは、長年の付き合いでわかってはいたが、ジャーネイク教授の娘のことは、なぜだか黙っていた。

「その男なら覚えているわ」

私は、彼女に忘れるということが出来得るのか、常々疑問に思っていた。

「憑かれた男ね。死を招くものを開花させようとしていたわ」

「それを承知で予言を与えたのか」

「そうよ。彼がそれを心から望んでいるのなら、仕方のないことよ」

「スターミネイド將軍が死を望んでいるというのか」

「御客の名前は聞かないことにしているわ」

女占い師は灰色の長衣を揺らしてどこかへ消え、マッシュウ茶と焼き菓子を銀の盆に乗せてきた。

「お腹が空いてるでしょう」

私は突然、自分がひどく空腹なことに気がついた。大皿一杯の焼き菓子を食べ、マッシュウ茶を五杯飲んだ。アマアッサは私が食べる様子を微かな笑みを浮かべて静かに見ていた。

「甘いものを食べるなんて、すぐく久しぶりな気がする」

彼女は「そうでしょうね」と言っつて、私が食べ終わるのを見ていた。

「君が紹介したナルカージェという仮面の魔道士は、ジャーネイク

教授の仮姿なのか」

「知らないわ。私はただ、南方からの魔道士が近々現れるだろうと言っただけよ」

「その魔道士は今どこにいる？」

「知らないわ」

「じゃあ、占っておくれ」

アマアッサはまた少しうんざりした顔をして、空になった皿と茶碗を片付けた。それから、薄い銀の水盤と水差し、私の血の付いた襯衣を持つてきた。

香炉に黄色い粉末を入れ、火をつけると、刺激のある濃密な花のような香りが流れ出した。

「將軍の大温室みたいな匂いだ」

「ここに座って、静かにして」

私は彼女に指し示されたまま、水盤を挟んだ向かい側の床に座った。占術師は袢衣の地の付いた部分を小さく切り取ると、水盤に浮かべた。それから、慎重な手つきで残りの布切れを叩いた。わずかに残っていたらしい蝶の羽の毒粉が、きらきらと光って水の上に落ちた。

アマアッサは目を閉じて、唇をわずかに動かした。微かな呟きのような呪文が聞こえた。彼女は目を閉じたまま細い腕を延ばし、私の左肩の傷に触れた。

薔薇色の半ば透き通るような壁や穏やかな色合いの敷物、水盤、彼女の姿、そうした目の前の情景が急にぼやけて、どこまでも遠ざかっていくような気がした。代わりに醜怪な蜘蛛の脚を持つ男の姿、極彩色の巨大な羽の幻影が、視界に立ち現れた。蜘蛛男や蝶人間は緑濃い密林を這い回り、色鮮やかな大輪の花の間を飛び回っていた。そこはスターミネイド將軍の大温室のようにも思えたが、車椅子の老人の姿はなく、黒い大きな蒸気缶も見当たらなかった。本当のナクシャツツの密林であるかのように思えた。

蜘蛛がすばしこく這い回り、蝶がひらひらと飛び回る内に、密林

の光景は少しずつ様変わりした。緑の色は黒ずみ、色とりどりの花は枯れ萎み、乾いていく。灰褐色の枯れ枝が緑の葉叢を突き破るように広がり、乾いた花は灰黄色の枯れ草となった。

どんよりと曇った空から小雪が舞い始め、蜘蛛も蝶も緩慢にその中を動き回っていた。風景は、枯れ木立と枯れ草の広がる凍った沼地のそれとなった。遠くには冬枯れしない木々の黒い森が見える。

その手前に古びた大きな家が見える。二階建ての四角い灰色の家。朽ちた板壁。所々頽れた駒形屋根。

家の前には黒い人影があった。頭巾付きのゆつたりした外套に身を包んでいる。蜘蛛と蝶の怪人は、ぎこちない動きで、雪の中をその男、あるいは家の方へ向かおうとしている。

風が吹いて、黒い頭巾の縁が捲れあがった。その中には顔はなかった。黒い闇の中に二つの濁った赤い目があるだけだった。

また風が吹いて頭巾を元に戻した。雪は吹雪になって、人影も家も二人の怪人も白い闇の中に消えていった。

はつとして、目を開けると（いつ目を閉じたのか記憶がなかったが）そこは雪原ではなく、古い師の薔薇色の館だった。アマアッサの深い董色の瞳には、いささかの憂鬱の色があった。

「思いの外、近いところのようね」

今、幻視した光景は、このサンジェリイ南方に広がる沼沢地のどこかであるようだった。

「あんな家がこのあたりにあるのかい」

「人嫌いのある変わり者の子爵が、大昔に建てた隠居屋敷ね。この百年は誰も住んでいないと思っていたけれど……」

彼女は百年来の沼地の出来事を見知っているかのような口調だったが、そのことについて尋ねるのはやめておいた。

「はつきりとした場所はわかるかい」

「ここから東へ半日ばかり行ったところよ。『赤い熊の森』の少し手前。古い街道の跡がまだ残っているから、迷わなくても済むと思うわ」

「ありがとう」

私は立ち上がって、黒ずんだ染みのある裂けた襯衣と、幾つも裂け目の増えた外套を手にとった。

「ランケン」と名を呼ばれて、私は彼女に向き直った。白磁の人形のような美しい顔は、沈鬱な表情を浮かべていた。

「誰も幸せにはならないわ。多分」

私はうなずいて、一つだけ頭に浮かんだ言葉で答えた。

「真実をあなたに、だよ」

10

私はアマアッサが貸してくれた羽のように軽い毛の肩掛けをしつかり体に巻き付け、その上に裂け目だらけの外套を羽織った。出立の準備が整うと、駅屋で借りた馬が雪原の中から現れた。

「僕が蝶人間の金粉を吸い込んでいるときに、雪が降ってきた。君の力かい」

馬は誰かが世話してくれたのか、妙に幸せそうな目をしていった。

「私はただの占い師よ。何かを告げるだけ」

彼女は謎めいた微笑を浮かべた。何かを告げることで、何かが変わることもあるのかもしれない。告げる相手は、いつも人間であるとは限らないのかもしれない。

私は「ありがとう」と曖昧な礼を言い、馬に乗った。

彼女は「気をつけて」とだけ言った。

空は薄曇りで、所々に微かな青味が見えた。一度だけ振り返ると、淡い薄桃色の占い師の館だけが、雪景色の中に唯一温もりのある色彩を放っていた。

古い街道の跡というのは、雪に埋もれてほとんどわからなかったが、沼地の水の浸入を防ぐための縁石や、倒れそうな道標、朽ちか

けた小さな橋が、辛うじてその道筋を示していた。

幾度か迷いそうになったが、やがて「赤い熊の森」らしき黒ずんだ森影が見えてきた。街道から南にはずれる道が辛うじて見てとれた。

黒い森と白い雪原の間に灰色の館が建っていた。アマアッサの幻術で見たよりも、ずっと大きく見える。隠居所としては素っ気ない作りの二階建ての四角い建物は、色褪せた板壁があたりこちららはがれ落ち、左右二つの頂を持つ駒形切り妻屋根も、瓦が落ち、崩れているところがある。玄関の破風や柱には枯れた蔦草が絡まり、見からに幽霊屋敷といった趣だった。

だが、屋根の四角い煙突からは薄い煙が立ち上っていた。

ファバーン剣の柄に手をやる。まだ、かなりの距離があつたが、妖気存在を示す痺れにも似た感覚をはつきり感じ取ることが出来た。

館の周りは沼地の水を引き込んだ濠のようなものが取り囲んでいた。馬を近くの枯れ木に繋ぎ、雪と氷の上を歩いた。凍りついた濠を渡り、堤に身を隠して館の周囲を廻った。戦のための城館ではない。左右の横手にも裏手にも出入口はある。どこが守りが薄いのだろうか。いや、そもそもこの館は、「何」が守っているのだろうか。

館を一周して、私は正面の玄関から乗り込むことにした。魔道士の術で察知されているのなら、どこから入り込んで同じことだろう。ここまで近づいても、何の反応もないということは、魔道士が何か他のことに精力を傾けているのかもしれない。スターミネイド將軍は言っていた。もうじき「私のレルウェル」が開花する大事なときだと。

観音開きの大きな扉には鍵すらかかかっていなかった。重苦しい軋む音がして、扉は内側に開いた。

途端にむっとする濃密な熱気と湿気、密林の臭いが押し寄せてきた。まるでスターミネイド將軍の大温室に入り込んだようだった。

私はたじろぎ、一步下がって、外の清澄な空気を吸い込んだ。

私はファバーン剣を抜き、緑の光を放つ刀身を館の中に突き刺すようにして、今一度足を踏み入れた。

ルファンス街の大温室とは違って、館の中は薄暗かった。鎧戸の破れ目や朽ちた壁の隙間からは鈍い光が差し込んでいたが、吹き抜けるの大広間をすべて照らし出すだけの光があるわけではなかった。

館の中は大温室と同じように緑が支配していた。だが、その緑は濃密で鮮やかな南方の葉叢とは思えないものだった。

灰色じみた薄緑色の蔦のようなものが館の中をくまなく覆っていた。広間中央のさして大きいわけではない「幹」からのびた無数の蔓草がねじ曲がり、渦を巻き、館中に蔓延っていた。床から壁を這い登り、大広間を取り囲む二階の回廊まで、さらには高い天井まで、灰緑色の蔓草は無数に枝葉を延ばし、館の内を何重にも張り巡らされた奇怪な蜘蛛の巣のように変えていた。

緑の蜘蛛の巣には、餌食がかかっていた。干涸びた人間の残骸のようなものが、ざっと見渡しただけでも、五人分ほどはあった。五人分ほどというのは、蔓草の力によつてか、四肢をばらばらに引き裂かれているものもあつて、正確にはわからないからだ。

大広間の真ん中には、奇怪な炉が設えてあつた。差し渡し五メートル（約一・五メートル）ほどの粗雑な石組みの中で、粗朶木が燃えていた。その上に鉄の廃材を組み合わせた巨大な五徳のようなものがあり、さらにその上には大きな鉄鍋が三つ、危うい均衡を保つて載っていた。鍋には煮えくり返った湯があり、白い蒸気を上らせている。

その湯気の向こうに「私のレルウエル」がいた。館中に這い回る蔦はすべてそこからのびており、灰色じみた色合いは、中心部に近づくと連れて緑が鮮やかになり、中央の「幹」では、若芽のような鮮やかな黄緑色になっている。

その「幹」が「私のレルウエル」そのものだった。見事に均整のとれた美しく若々しい緑色の女体、そこからのびた無数の蔓草が無

限に枝分かれし、館中を覆い尽くしているのだった。

彼女の足先は、ねじれて節くれ立った灰褐色の根となり、床板を貫いていた。高く差し上げた細腕の先から、弓なりに反らした背中から無数にのびる緑の蔓は、絡み合い、渦を巻き、広間の高い天井や壁際まで広がり、屋敷の内に密林を形作っていた。

手足の先は蔓草に繋がる若草のような黄緑色だったが、その色合いは体に近づくとつれて薄れていき、なよやかな曲線を描く乳房のような膨らみや臍のような窪みすら微かにある下腹、二つに分かれつつあるように見える太腿では、僅かに緑を帯びた白磁のような艶やかさを見せていた。

レルウエルの顔は、文字通り花の顔だった。差し渡し二メートル（約六十センチ）近い大輪の花がそこに咲いていた。

五枚の花びらは、中心から豊かに膨らみ、片縁では無数の大小の襞をつくっているが、先に行くとき急に細くなり二つに割れて尖っている。中心部は青白く、花弁が広がるに連れて、血のように鮮やかな赤となり、先端ではまた黄色味を帯びた白となっている。

赤い花びらの中央、雄蕊や雌蕊のあるべきところにある白緑色の卵形のものは、女の顔の原型だった。

それは大胆に細部を省いた新しい形の女の顔の彫刻であるように見えた。目も鼻も口も曖昧な窪みと高まりに過ぎなかったが、それでも、その顔は十分に美しかった。

微かに甘酸っぱいような匂いがした。これがスターミネイドを、ジャーネイクを虜にした初めての女の匂いなのだろうか。私は引き込まれるように一步二歩足を進めた。

甘い香りを吸い込むと、何か頭の内で弾けるような感じがした。突然、鮮やかに蘇ってくる記憶があつた。緑の木々に囲まれた古い小さな祠、葉叢の向こうに見え隠れしている港、うるさいくらい蝉の音がする。私は淡い水色の服を着た少女を抱きしめていた。少年のような短い黒髪、黒い大きな瞳、浅黒い肌のなめらかな感触、汗の匂いとそれだけではない甘い匂い。あの娘の名は何と

言つたのだろう、何と……。

「それ以上近づくと、君も私やあの卑劣漢と同様の運命になりますぞ」

私は甘い記憶の夢から引き戻され、足を止めた。ファバーン劍の柄を握りしめ、妖しの花から何とか目をそらし、後退つた。

絡まり合つた蔦の間から滑るように黒い影が現れた。黒い頭巾付きの長衣に身を包んだその人影は、何気ない仕草で一束の粗朶木を炉に焼べた。見え隠れする両の手も、黒い手袋で覆われている。粗朶木を持つてきただけではなく、赤黒い染みだらけの布袋も引きずつていた。

火の勢いが増し、湯気が渦巻くように上がると、家の中を埋め尽くした奇怪な植物は無数の蔓を蠢かし、人のざわめきのような音をたてた。

黒い人影は、汚らしい布袋から何かを取り出し、レルウエルの前に置いた。それは血みどろの肉塊のように見えた。次に取り出したのは、臓物だった。長い腸の一部が見えた。三番目に取り出したのは、血に塗れた男の首だった。

奇怪なざわめきが大きくなり、腕の先や背中から生えた緑の蔓が、蛇のように動き出した。無数の緑の触腕は、供物を撫で回し、絡み付き、ずるずる、ちゆうちゆうという不快な音を発した。見る間に破壊された人体を覆つていた鮮血はきれいになくなつていった。

水で晒したようにきれいになつた人間の断片を緑の触腕はつかみ上げ、真紅の花の中央、美しい女の顔の前に差し掲げた。

顔はいきなり異形のものとなつた。美しい曲線を描く額から鼻への高まりが真つ二つに裂け、鮮紅色の肉襞が左右に開いた。ぱつくり裂けた「顔」の中では、蚯蚓の塊のような肉襞が蠢き、それを突き破るかのような鋭い牙（と言つていいのだろうか）が縦に何列にも並んでいた。

動く蔓草が、肉塊をその口の中に押し込んだ。ぐちゃぐちゃとい

う不快な音をたてて、レルウエルの「口」は、肉塊を嘔み下した。溢れ出た鮮血は、滑らかな薄緑の肌の上を流れ落ち、足下に達する前に肌に吸い込まれて消えていく。

臓物も同様に平らげると、彼女は男の首に取りかかった。「顔」はさらに裂け目を広げて信じ難いほど大きく開き、首の上半分を飲み込んだ。骨の碎ける音がして、男の顔は鼻から上が粉碎され、血と灰色の脳味噌が飛び散つた。「口」が男の頭部を咀嚼する間、下半分になつた首を持つた緑の触腕は、辛抱強く待つていた。

細く美しい彼女の喉がぐくりと鳴り、男の頭蓋と脳味噌を飲み込むと、触腕は血みどろの首の下半分を口の中に運んだ。また、骨の碎ける嫌な音がして、口から飛び出した男の歯が何本か、私の足下に飛んで来た。黄ばんだ奥歯が二本、前歯が一本だった。奥歯の一本には虫歯の黒い穴が開いていた。

歯の観察を済ませてから、レルウエルの顔をもう一度見ると、閉じた口の合間から、太い血管の切れ端が飲み込まれていくところだった。一瞬でそれが姿を消すと、「顔」の裂け目は完全に見えなくなり、元通りの白緑色のつるりとした女の「顔」となつた。点々と残つていた血痕も、最後の一滴まで肌の中に吸い込まれ、見えなくなつた。

彼女の食事を見届けた黒頭巾の人物の後ろ姿は、どこか満足気にも見えた。彼はゆつくりと振り向いた。黒い頭巾の下から、見えな

い黒い視線が発せられ、私を射抜いた。  
「スナブ・ランケン君だね、よく来た。君のことは、遠い昔にシュレンヤー君に聞いたことがあるよ。権威には反抗的だが優秀な学生だと言つていた」

黒頭巾の男の声は、存外に穏やかで、落ち着いた響きがあった。だが、蛇のたてるようなしゅうしゅうという不自然な嫌な音が常にその声にはつきまとつていた。

「今日は僕の昔の成績について話をしにきたわけではありません、ジャーネイク教授」

「おお、その名で呼ばれるのも何と久しいことだ。（ここで黒衣の男は、ひどく嫌らしい下卑た笑い声を漏らした。）だが、今の私は密林の魔道士ナルカージエだ。そう呼んでもらおう」

「では、魔道士ナルカージエ、スターミネイド將軍の大事な花を返してもらおうか」

そこでまた、黒衣の男は不快極まりない笑い声をあげた。それから、彼の言葉は次第に激しいものとなった。

「私のレルウエル』を返せというのか！はっ！『私のレルウエル』はあの老いぼれの脚萎えの人殺しのものではない！断じてない！『私のレルウエル』は、この私のものだ！」

魔道士は黒い手袋に包まれた両手を振り回し、自分の胸を叩いて叫んだ。頭巾が揺れ、その中の黒い仮面が見え隠れした。光を吸い込むかのような、黒い艶のない仮面は何の装飾もないのっぺらぼうで、ただ目の位置と口の位置に、ぼつかりと虚ろな穴が開いていた。穴の奥の瞳は見えなかった。

「あの卑劣漢の話は聞かされたんだろう！自分一人だけが九死に一生を得た、という悲劇の英雄譚を！」

私は無言でうなずいた。

「では、今度は私が語る番だろう。如何にして、あの卑怯者が自分の妄念を果たそうとしたかを！そして、如何にしてシュヌベル大学教授ジャーネイクが魔道士ナルカージエとなったのかを！」

振り回される黒手袋の両手は不自然に震え、異様な動き方をしているように見えた。五本指の手袋は、彼の手の形にあまり合っていないようにも見えた。

「マツアオン・グランゾの地下神殿で、この類稀なる靈花を発見したのは、この私だ。私は、探検行の真の意味も理解せず、粗野な自慢話と下らぬ賭け事に熱中する軍人どもに辟易し、緑に包まれた石の廢墟を彷徨っていた。国王陛下直属の金蹄隊といえども、その本質はマツアオ・モルゴとさして違いのない蛮人のように感じていた。

「ただ一人、スターミネイドとは何故か気が合って、幾度か酒杯を重ねたこともあった。彼は軍人にしては多識であり、常に冷静で学問にも理解を示していた。そう、私はそう思っていたのだ。」

「静謐な小暗い通路を歩いていくうち、私は地底の広間に到達した。巧みな業で地上から光を取り入れた石室には、今、ここで見ているような光景が広がっていた。」

「私は奇怪な植物の美しさにうたれ、苔むした石畳に跪き、その尊顔を仰いだ。はつきりとした目も鼻も口もない顔だったが、雅やかでありながらも扇情的な美しさは、私をすぐさま奴隷のような心境に陥れた。無論、純粹に学者としての興味も感じてはいたが、私の心中を支配していたのは、年若き頃初めて抱いた、女性への言葉では表し難い憧憬だった。君も嗅いだだろう、あの匂いを。あの匂いが近づく男を虜にするのだ。単に男としての衝動を呼び起こすだけではない。記憶の奥底から、年若き日の女性への思慕の感情を呼び覚ますらしい」

魔道士の語りに合わせてるように、彼の背後では、今し方血みどろの死肉を食った美しい花が真紅の花弁を震わせ、緑の蔓を艶かしく蠢かした。

「感傷的な、だが、同時に本能的でもある幻想に浸っていると、それを打ち破る声が背後から聞こえてきた。『レルウエル……私の花……』という嗄れた声に振り向くと、そこには金蹄隊の將軍が空けた顔で花を見上げていたのだ。」

「急に非常な焦燥感が沸き起こった。この男に私の花をとられてなるものか、という気持ちだ。恐ろしい嫉妬心も沸き起こった。だが、この靈妙なる植物を今すぐそのままの形で持ち去ることはできない。階段状の神殿となった石室には、種子と思しき卵形の球体が石の台座の上に置かれていた。これを持ち帰ればよい、そう考え、種子に手を伸ばした刹那、スターミネイドは劍を抜き放ち、私の腕を切断するかの構えを見せた。」

「『これは私のレルウエルの種だ。これは私のものだ！』彼奴はそ

う言い放ち、私の手を刃で阻み、人の頭ほどもある種を手にした。奴の灰色の目は血走り、ぎらぎらとした異様な光を放っていた。妖異の花がもたらしたのか、彼の内心より噴き出してきたものか、明らかな狂気の光がそこに宿っていた。

「スターミネイドは片手で種子を抱えると、もう一方の手に握った剣を振り上げた。卑劣な軍人は、己が欲望のために私を殺そうとしたのだ！」

ナルカージェは、蘇った怒りに黒い長衣に包まれた両肩を震わせた。その感情がそのまま伝わったかのように、奇怪な蔦のような植物は絡まり合う枝と葉と蔓をざわめかせ、不快な軋みを家中に響かせた。

「だが、蠅と蛇の百万の精霊たちはすべてを見知り、神聖を冒すものに、最後の毒針を放った。通廊の向こうより、その時轟き渡った鬨の声と太鼓の響き！ マツアオ・モルゴの戦士達が乾いた地の蛮人どもに鉄槌を下したのだ。」

「通廊から地下神殿に、赤い霧が流れ込んできた。マツアオ・モルゴの毒霧だ。さらに血塗れになった金蹄隊の兵士どもが幾人も転がり込んできた。何本もの矢を鎧に突き立てているものもいた。今でも覚えているぞ、奴らはこう叫んだ。『將軍殿！ 蛮族の襲来です！ もはや、防ぎきれませぬ！ 將軍殿、下知を！』」

「哀れな兵士達へのスターミネイドの答えはこうだ！ 『渡さぬ、誰にも渡さぬぞ！ レルウエルは私のものだ！』 將軍殿は私に向けていた刃を返すと、配下の兵士に斬りかかったのだ！」

「狭い通廊での剣戟の中、傷を負った兵士の剣がスターミネイドの左腕を傷つけた。奴は種子を取り落とした。私は必死で刃をかくぐり、その薄茶色の大きな種に抱きついた。無我夢中で通廊を走った。背後からは將軍の狂気じみた怒声が響いてくる。地上に出ると、そこは血みどろの屠殺場のようなだった。マツアオ・モルゴの戦士たちは毒矢や吹き矢で倒れた兵士の死体の鎧を剥がしては、その身体をぶつ切りの肉塊に変えていた。ランケン君、君が今見た、こ

の靈妙なる草木の食事の準備をしていたのだ。

「だが、その時の私に、そんなことがわかる由もない。私は只、恐慌に陥り密林の中へ逃げ込んだ。何処をどう逃げたのか、覚えてはいない。絡み付く蔓草に着ているものはぼろぼろになり、血だらけになって、気がつく、轟々と音を立てる滝壺を私は見下ろしていた。腕の中にはまだあの花の種があった。愛おしい女と二人きりになれた、そんな奇妙な安堵感、満足感を感じていた。」

「私は叢に腰を下ろし、改めてその種子を眺めた。明るい褐色の表は滑らかで、不思議なことに柔らかで湿り気があった。真ん中に薄桃色のごく細い亀裂があって、そこからえも言われぬ芳香が立ち上ってくる。私はそこで種を抱えたまま、陶然として座り込んでいた。そのまま、眠るように死んでいけば、幸せだったのかもしれない。」

「けれども私の夢のような気持ちは、茂みをかき分ける音と、甲冑の鳴る音で破られた。振り向くと、そこには血みどろの鬼のような形相をしたスターミネイドが立っていた。『見つけた！ 見つけたぞ！ レルウエル、私のレルウエルだ！』 金蹄隊の將軍は、気狂い染みた声で叫び、血と肉片のこびり付いた剣を振り回した。私は必死で刃を避け、逃げ回った。だが、狂気の男と滝壺に挟まれた私には、ほとんど逃げる場所はなかった。」

「幾度目かに奴が振り下ろした剣が、私の右手首を切断した。血塗れの種が、私の手首と一緒に叢の上に転がった。私は激痛の中で残る左手を伸ばしたが、奴の剣がその手も斬り落とした。」

「奴は勝ち誇った笑いを浮かべ、種を拾い上げると、私を鉾のついた軍沓で蹴り飛ばした。私は滝壺に落ち、何もわからなくなった」

ナルカージェは斬り落とされたという手袋に覆われた両の手に視線を落とし、苦悶の記憶に身震いした。それに合わせるかのように、背後の植物も無数の蔓草を震わせた。

「次に目を覚ましたときは、緑の大葉で屋根を葺いた小屋の中にいた。驚くべきことに私はマツアオ・モルゴに救われたのだ。密林の

蛮族と見えた彼らは、高潔で誉れ高い人々だった。神聖な神殿を侵した我らこそ、許し難き夷狄なのだった。彼らは傷つきながら九死に一生を得た私を、精霊の意志により生かされたと考え、手厚く介抱してくれた。彼らなりの介抱の仕方ではあったが。

「妖術師が絶え間なく呪文を唱え、奇怪な仮面を被った魔法医が施術を行った。濃密な花のような香りが意識を曇らせ、我が身に何が起こっているのか、明白に知ることは困難だった。」

「身を起こすことができるようになった時、私は自分がかつての自分とは異なる存在となつてを知つた。密林の中で、私は長の年月を過ごし、マツアオ・モルゴの奇怪極まる妖術と呪法を学んだ。単に学んだというよりも、彼らとともに研鑽に励んだと言うべきかもしれない。私は彼らに自分の知る限りのメルカーの魔術の知識を伝えた。無論私の学ぶべきことの方が遥かに多かつたが」

ナルカージェの口調は穏やかになり、ジャーネイク教授の朧な影がそこに現れたかのようにも思えた。黒衣の怪人物は、しばし沈黙し、うつむいたまま緑の魔境での日々思いを馳せているようだった。

「だが、卑劣な軍人への怨念を忘れることは一時としてなかつた。そしてまた、あの花への想いも。私は機が熟すのを待ち、サンジェリイへ帰還した。シュヌベル大学の教授としてではなく、密林の魔道士ナルカージェとしてな。」

「その後のことは、ランケン君、君が知る通りだよ。あの種を芽吹かせることには成功したものの、花を咲かせることができずにいた愚か者の温室へ入り込み、奴を利用して開花寸前まで育て上げた。奴の妄念が絶頂に達したところで、奪い取つたのだ！」

彼自身の物語を語り終えた魔道士ナルカージェでありジャーネイク教授である人物は、満足げに一人うなずいた。その光を吸い込むかのような黒い仮面の下では、歪んだ笑顔が形作られているのだろうか。

「その花を開かせるためには人肉が必要なのか」

私の問いに、復讐者は肩を揺らして奇怪な含み笑いを漏らした。

「ランケン君、良い質問だ。その通り、開花とその後の誕生のためには、供物が必要なのだ。人間の血と肉と骨が必要だ。それも十分に。無知なスターミネイドはそのことがわからなかつた。幾らナクシャツの密林のような熱気と蒸気を与えても、それだけでは花はつかない。私がそれを教えた。奴は「私のレルウエル」のために、ルフアンズ街の廃屋に巢食う乞食や淫売を誘い込み、その血と肉を与えた。レルウエルは大きく育ち、女人の似姿となり、大きな苔をつけた。だが、奴が見ることができたのはそこまでだ。私が取り戻し、花開かせ、誕生のときを今、待っているのだ！」

仮面の男の佝屈な笑い声に合わせるかのようになり、植物は蔓を蠢かし、葉を揺らし、薄緑の女体をくねらせた。妖しい人面花と南方からの呪術師の心情は同じ音曲を奏でているかのようであり、その有様を見ていると、まるで植物の動きが先んじて、それに合わせるかのように呪い師の話と気持ちの昂りが演じられているようにも思えた。

「誕生というのは何のことだ？まだ、これから何かが起こるというのか？」

ナルカージェの笑いはさらに大きなものとなつたが、それはもはや人間の笑い声とは思えず、巨大な蛙が喉を鳴らしているかのような奇怪極まりない音声だった。

「ランケン君、実によい質問だ。愚かなスターミネイドは、このこともまた知らなかつた。花が咲けば、それで終わりだと思つていたので。今のこの姿が人面花の成熟した姿だと。だが、違う。この後、生まれ出る姿こそがマツアオン・グランゾの人面花の真の姿なのだ！」

魔道士が大きく腕を振り回したので、黒い手袋とゆつたりとした長衣の袖の合間にちらりと何かが垣間見えた。濁つた緑色の縄状のものが。

「それにはランケン君、さらなる供物が必要だ。君は実に良い頃合



いにやつて来てくれた。ロストナムの下郎一人では、我が姫君はいささか空き腹のようだ」

陰気な特等書記官殿もまた、ここを嗅ぎ付けていたらしかった。

魔の植物は密やかな囁き声のような音を出して緑の蔓と赤い花びらを小刻みに震わせた。はつきりとした造作のない「顔」に、これから訪れる愉悦への期待で、笑みが浮かんでいるかのように見えた。

私はファバーン剣を構え直した。刀身の神秘文字はずっと緑色の光を放ち続けている。

その時、突然、館の扉と一階の窓が蹴破られた。黒尽くめの男たちが十人ばかり踏み込んできた。皆、反り身の短い刀を手にしている。

「ジャーネイク教授、そこまでにしていたきましようか」  
何の感情も感じさせない、ひどく平板な声があった。

## 11

先頭に立っているのは鍰広の黒い帽子を目深にかぶった小男だった。『割れ兜』でシエアを飲む振りをしていた男のように見えた。

小柄で体つきに合わない押し潰したような低い声だ。

「おお、特等書記官殿、今度は直々のお出ましですな。お仲間も大勢つれて。我が緑の姫君も大層なお喜びですぞ」

小男は魔道士の軽口には答えず、帽子を上げて顔を見せた。人生に疲れているかのような、これといった特徴のない中年の男だった。血色の悪い黄ばんだ顔の中に、濁った黒い目が埋め込まれていた。そこには一片の感情というものも見えなかった。

「ジャーネイク教授、あなたにはご忠告申し上げたはずですよ。国王陛下と金蹄隊將軍の誉れを傷つけるようなことはなさらぬように

と。然るに、あなたはそれを無視し、あまつさえ私の大切な配下をその化け物の餌食としましたな。消えていただく他ありません」

抑揚のない声で、彼は死刑を宣告した。

「感謝しておりませぬ、特等書記官殿。貴殿から頂いた金子はいろいろと役に立った。ナクシャツツの密林とは違って、サンジェイイでは金がものを言いますからな。それに、貴殿の差し向けてくれた男、密偵だったのか刺客だったのかは存じませぬが、大切な供物とさせていただいた。姫君もさぞお喜びだろうて」

ロストナムは、何も答えず表情も変えず、私の方へ視線を移した。

「探偵、おまえは忠告を無視して、私の配下の者を二人も殺した。死んでもらおう」

言葉遣いはずいぶんと違っていたが、底知れぬ無情の響きは同じことだった。

「一人は御前が殺した。もう一人もそれほどの深手だったのかどうか、わからないね。それに僕は金はもらってないぜ。また外套を新調しなくちゃいけないのに」

特等書記官は何も答えなかった。話ができるが会話は不得手なのだろう。

暗殺者の頭目は、左手をほんのわずか動かして配下へ合図を送った。いつせいに黒尽くめの刺客たちは刃を振り上げ、私と魔道士めがけて襲いかかってきた。

私がファバーン剣を振るうよりも、ナルカージェが呪文を唱えるよりも速く、無数の緑の触腕が動いた。

ある者は首を締め上げられ、ある者は腹を貫かれ、ある者は四肢を引き裂かれた。無口な男たちの絶叫が館の中に響き渡り、血飛沫が雨のようにざあつと音を立てる。一瞬の後にロストナムの配下は半分ほどになつていった。

運良く生き残った者たちは、いささか慎重に蠢く蔓草に斬りつけ、蛇のようなそれを何本も切断したが、緑の蛇は切っても切つて

も無数に伸び出し、絡み付いてくるのだった。

奇怪な植物の動きはそれだけではなかった。「彼女」の足下からは無数の髭の生えた薄茶色の根のようなものがのび、床に転がる血まみれの死体（中にはまだ生があり、痙攣を続けているものもあった）に絡み付き、ずるずると嫌な音をたてながら、艶めく女体の下へ引きずっていくのだった。

残る暗殺者たちと闘いを続けながら、「レルウエル」は新たな食事に取りかかった。ナルカージェは死体を切断して彼女に与えていたが、もはやそんなことは不要らしかった。

根に薄緑の蔦も協力して、彼女の食事の準備はすすんだ。黒尽くめの男たちの身体は、文字通り八つ裂きにされ、血みどろの肉塊と化した。溢れ出る大量の血は、根や蔓から見ると吸収され、消えていく。真紅の花びらの中央に肉の裂け目のような口が開き、何人分もの肉と臓物がその中へ消えていく。

形勢不利と見るや、ロストナムは「火だ！」と短い命を下した。忠実な部下の男たちは、何とか襲い来る触腕をかわして、燃え立つ炉の方へ近づこうとした。一人目、二人目が蔓草に巻き付かれて息絶える合間に三人目が石造りの炉に達した。彼は燃える粗朶木を急いで何本か引き出すと迫る触腕に押し付けた。

女の悲鳴のような叫び声はどこから起こったものなのだろう。肉を喰らい、生き血を啜る花の中の口が上げたものなのだろうか。炎に焼かれた緑の触手は、縮み上がり、炎の熱から逃れた。男は、燃える粗朶木を持ったまま、鏝広帽子の主の下へ駆け戻った。

「燃やせ！屋敷ごと燃やしてしまえ！」

生き残った男は、ぼろぼろになった窓掛に火をつけた。窓掛はたちまち燃え上がり、炎は窓枠や框に燃え移った。彼の足下の床板が突然吹き飛び、灰褐色の触腕が飛び出した。奇怪な動く根は男の足首に巻き付き、男は絶叫とともに床下に消えた。

「ふふ、ふふふ……この廃屋を燃やして何とするのか。おまえ達が十分な供物を自ら捧げてくれた。誕生のときは来たのだ！」

ナルカージェは特等書記官一派が攻め入る間、ずっと唱え続けていた低い呪文を中断し、そう叫んだ。炎にたじろぐ蔓草を右に左に斬り払って、ロストナムが魔道士に迫った。

ナルカージェは黒い仮面を自ら投げ捨てた。人間のものではない顔がそこにはあった。

蜘蛛男も蝶人間も彼の手によつて作り出されたことは間違いない。だが、仮面の下に現れた彼の顔は、そうした単純な言葉で言い表せるものではなかった。

虫が這い回っていた。無数の百足、蚯蚓、蛭、蛆、得体の知れない長虫が絡み合い、彼の顔を覆っていた。それは単に顔に貼り付いているのではなく、首のあたりや額のあたりで肌にとけ込み、むしろ身体の中から生えているかのように見えた。

鉄面皮の暗殺者も足が止まり、わずかな驚きの表情を見せた。

「驚いたかね、瀕死の私をマツアオ・モルゴの魔法医は密林と共生する術をもつて救ってくれたのだ。私はマツアオ・グランゾのあらゆる生き物と、共に生きる存在となったのだ」

蠢く虫の顔の中で、そこだけが人間のものである目が、マージナスの言う父の目が、ぎらぎらと光つて私とロストナムを交互に見た。

一人、父を思つてひっそりと暮らしている女の顔が頭に浮かんだが、彼女にうまく事情を説明することは至難の業のようだった。

魔道士は黒い手袋も脱ぎ捨てた。現れたのは緑と灰色の蔓と枝が絡み合つて作られた手のような形のものだった。

炎は窓掛から壁に燃え移り、壁際の灰色の枝や蔓にも火がついていた。人面花は新しい犠牲者の肉を喰らい尽くし、悲鳴を上げるのもやめ、動きを止めていた。

「エル、パソラ、フェリカ、トラゾ、マツアオ・グランゾ、ソル・ネグラ・マリンス、エル、モジカ……」

ナルカージェは虫の蠢く口で早口に呪文を唱え、蔓草がのたうつ指で奇怪な印形を結んだ。呪文は早まりながら、低い声となり、次

第に蜂の唸る羽音のような怪異なものとなった。

私は金縛りにあつたように身体が動かなかつた。ちらりとこちらを見たロストナムも同様らしく、私は皮肉な笑みを浮かべてみたが、特等書記官殿は愛想がなかつた。

炎は勢いを増し、館中を覆っていた枝葉の半ばまで火が回っていた。唸るような炎の音、枝が爆ぜる音、二階の回廊を支える細い柱が焼け落ちる音が響き渡つた。逃げなければならなかつたが足は動かさず、視線は人面花へと吸い寄せられた。まるで、見えざる力で見られることを強要されているかのようだった。

蜂の羽音のような呪文も止み、密林の魔道士は彼の女神の前にひざまずいた。

大きな赤い花びらが一枚一枚ゆつくりと落ちていった。薄緑の女性の頭頂部から細い白い筋が下に伸びていく。首から胸乳の間を通り、下腹へ、さらに融合している腿の間から薄茶色の根が伸びている足下まで、白い線が走つた。

植物が一度二度艶かしく身体を蠢かすと、筋は裂け目となり、頭の上からゆつくりと左右に広がっていった。薄く艶のある白緑色の皮膚の中から現れたものは、真正正銘の女だった。透明な粘液に濡れた髪は漆黒で、項の辺りまでの長さ、一点の染みもない滑らかな肌は炎の朱の光を浴びてさえ、青白く見える。切れ長の目、少し上を向いた尖つた鼻、端の切れ上がった唇、小さな顎が、突き刺すような鋭さを感じさせる美しい面立ちを形作っていた。

小さな肩が薄緑の表皮から現れると、彼女は伏せられていた長い睫毛を上げ、こちらを見た。彼女の瞳は光り輝く緑玉石だった。寶石職人が禁忌の秘法をもつて細工したかのような不思議な光が発せられ、一度視線を合わせれば二度と反らすことはできないかのような煌めきがあつた。

彼女が上半身を反らすようにすると、円錐形を描いた小ぶりの美しい乳房が現れ、ほっそりとした両の腕を抜くと、緩い長衣が身体から落ちるかのようになり、薄い皮膚は足下に落ちていった。えも言わ

れぬ芳香がその瞬間に立ち上つた。甘く蕩けるような、濡れたような、何かの匂い。

完璧な美の化身がそこに立っていた。少女のような線の細さと豊かな曲線が交錯する肢体と、蠱惑の光を放つ緑の瞳に抗うことは、誰にもできないように思えた。

私の頭の中には、再び水色の服の少女の幻が浮かび上がった。彼女の顔立ちと花から生まれた女の顔立ちは、似通っているわけではないのに、何故か二人の姿が重なりあい、揺れ動いて、一つのものとなるうとしていた。

だが、この緑の館の主は私ではなかつた。

「おお、おおう……お生まれになつた。我が姫よ、私の、私のものだ……」

ナルカージェの狂気じみた声とファバーン剣から伝わってくる痺れるような感覚が、私を現世に引き戻した。

異形の魔道士はうわ言のように繰り返しながら彼女にいざり寄り、蔓草と細枝でできた奇怪な手をのぼした。

花から生まれた女は、ナルカージェの醜怪な姿に驚くこともなく、白く細い指を緑と灰色の手のようなものに絡ませた。翠玉の瞳を半眼に細め、薄桃色の唇に微かな笑みを浮かべた。

「私の……私の……」

彼女は密林の魔道士を細腕でかき抱き、熱に浮かされたような吹き声は白い胸の中に消えた。数百の長虫がもつれ合ったその顔をそつと持ち上げると、女は蚯蚓と蛆で作られた唇に口づけた。

一二度、奇妙な痙攣するような動きをした後、ナルカージェの身体からは力が抜けぐつたりし、女の腕で支えられているように見えただ。

口づけは長く、永遠に続くかのように思えた。炎は天井近くまでまわり、焼けた壁板や木切れが落下していた。私は呪縛が解け、身体が動くようになったことを感じたが、魅入られたようにその奇怪な口づけを見ていた。

魔道士の奇怪な頭部が急激に縮み、しわくちゃの茶色い塊のようになつた。灰色に乾いた百足や蚯蚓の断片がばらばらと落ちた。黒い長衣はだらんと垂れ下がり、中には何もなくなつたかのようだった。

妖女が手を放すと、茶色と灰色と黒の襪のようなもの床に転がった。歪んだ木乃伊のような死に顔には、皺やひび割れがつくる偶然なのだろうか、満足げな笑いが浮かんでいるようにも見えた。

二階の回廊が崩れ落ちようとしていた。炎に包まれた柱が何本か連なるように折れた。呪縛が解けると、熱気と煙は耐え難いものだった。

音をたてて回廊が崩壊し、部屋中に蜘蛛の巣のように張り巡らされた蔓と枝を押し潰した。大きな火の手が上がり、奇跡のような白い裸身と緑玉の瞳は炎の向こうに見えなくなつた。

私は踵を返し、玄関へと走つた。幸い玄関部分に回廊はなく、戸口はまだ形をとどめていた。私は外套を頭からかぶり、炎と煙が渦巻く出口へ飛び込んだ。

雪の中を駆け回つて、外套に燃え移つた火を消した。もう一度買ひ直す必要があることは明らかだった。

雪景色の中で、紅蓮の炎に包まれ館は燃え落ちた。黒と灰の焼け跡の中に、生きて動いている者の姿を見出すことはできなかった。

呼び鈴の紐を引いても、大きな声を出しても、執事は出てこなかった。ルフランス街の大温室のある屋敷は静まり返つていた。一度やんだ雪は、朝からまた降り始め、新しい外套を通して冷気が染み込んでくる。

白つ茶けた分厚い木の扉は押しても引いてもびくともしなかつ

た。私は雪の積もつた庭を温室の方へ歩いた。朝からの雪に薄れかけていたが、庭には足跡があつた。小さな裸足の足跡のように見えるた。

足跡は屋根付きの回廊で途絶えていた。大温室の扉は細く開いていた。扉を開けて中に入ったが、過去二回ばかり訪れたときのような熱と蒸気は感じられなかった。鉄と硝子の大温室を埋め尽くす密林の濃緑も心なしか艶やかさを減じ、大小の葉もしなだれているように見えた。飛石の通路を歩いて奥に分け入つても色鮮やかな蝶は飛んでこなかった。

黒い巨大な蒸気缶は、まだ幾らかの熱を保っていたが、炎は絶え、無音のままだった。

蒸気缶の前には、螺鈿と銀細工の車椅子があつた。高価なラトリオンの毛布が無造作にかかっていたが、王座の主はそこに座つてはいなかった。灰色の手袋が落ちていた。

「私のレルウェル」が植えられていた穴に向かつて手を伸ばし、スターミネイド將軍は俯せに倒れていた。灰色の長衣の中のその身体は子ども程の大きさしかないようだった。伸ばした両の手は、灰色の木乃伊のように干涸びていた。

將軍の頭部は異様な角度で曲がり、上を向いていた。事切れる間際まで、手を伸ばした先のものに視線を合わせていたかのようだった。

灰色の萎びた顔には、仮面の魔道士と同様の歪ではあるが満ち足りた笑みが浮かんでいた。

私は動くものの気配を感じ振り向いた。抜き身の魔剣は静まつたままだ。

葉叢の中から執事が這い出した。死人のような土気色の顔をしていたが、木乃伊にはなつていなかった。

「御主人様は、ご、御主人様は……あの、あの女が来て……」  
私は瀕死の男を抱き上げ、たどうなずいた。

「昨夜、あの女が裸でやって来て、寒い、寒いと……。私はお止め

申し上げたのですが、御主人様は、レルウエルが、私のレルウエルが帰ってきたと……そして、御主人様は……」

執事はそこまで語ると息絶えた。

冷気が大温室の中を支配しようとしていた。蒸気缶の熱は急速に失われ、冷たい鉄の墳墓と化していた。私は蒸気缶の鉄の扉に触れてみた。掛け金を外し、扉を開けると大量の灰が見えた。まだ形をなくさず人骨の形をしているものもあった。

温室を後にしようと歩き出すと、色とりどりの密林の花々が音もなく散り始めた。

スターミネイド邸の門を出て、人気がない通りを歩いた。降る雪の中をこちらへ向かってくる黒い人影がある。鏝広の帽子を目深にかぶった小男だった。

私たちは間合いをとって対峙した。

「スターミネイド將軍は死んだよ」

「そうか、では今回の一件もほぼ落着きということだな」

何の感情もない声で男は言った。私たちはしばらく押し黙って相手の顔を見ていた。ロストナムの頬には火傷らしきひどい傷があった。

ややあって、私たちはゆっくりと歩き出し、次第に足を速めるとすれ違い様に剣を交えた。ファバーン剣が奴の短剣を弾き飛ばし、二の太刀が胸から腹を切り裂いた。

倒れた奴の身体の下から、真っ赤な血が流れ出した。何か意外なような感じがした。どす黒い腐汁のような血が流れ出るべきだと、思っていたのかもしれない。

た。黄色い漆喰と緑色の屋根の家が見えてくると、喉に苦いものがこみ上げてくるような気がした。

馬車から飛び降り、仮漆のはげた扉の敲き金を叩いた。応えがなかった。何度も叩き、「マージナス、マージナス！」と名を呼んだ。

十回くらい名前を呼んだ後、扉の向こうから「誰？」という低い声が聞こえた。ロストナムはここには現れなかったのだ。私は大きく息を吸い込み、吐き出し、呼吸を整えた。

「誰、誰なの？」

扉の向こうのマージナスの声は、不安と苛立ちに鋭い口調になった。

「スナブ・ランケンだ。君の探偵だよ」

扉が細く開き、黒い瞳が私を見た。

「あなたね、入って」

暖炉の火は細々と燃えていたが、とても暖かいよう気がした。

マージナスは、今日は髪をほどいていた。白地にくすんだ薔薇色の花模様服が、緩やかに波打つ髪と少し雀斑の浮いた物憂げな顔に似合っていた。

「座って」

私は言われるままに暖炉の前の椅子に腰を下ろした。彼女は奥に消え、青いブゴムの酒瓶と髑髏模様の杯を二つ持ってきた。

「飲むでしょ」

私はうなずき、彼女は二人分の酒を酒杯に注いだ。

「ジャーネイク教授は亡くなりました」

自分の声がひどく虚ろで感情のないものに聞こえた。まるで特等書記官のようだが、という考えが頭に浮かび、私はさらに嫌な気分になった。

「そう。そんな気がしていたわ」

マージナスは短く答えると、杯のブゴムを飲み干した。

私は事の顛末を彼女に語った。幾つか、嘘をついた。ジャーネイ

ク教授は、マツアオン・グランゾでひどい熱病にかかり、仮面をかぶるようになった、純粹に学者としての探究心から人面花を開花させようとした、云々。

「ジャーネイク教授は変わり果てた姿を君に見せたくなかった。それに、例の特等書記官が君に害を及ぼすのを避けたかった。だから、この屋敷には帰ってこなかった。あの魔道書だけは、研究にどうしても必要だったので、取りに戻った」

私が語り終えると、彼女は青い瓶から自分の酒杯にもう一杯ブゴムを注ぎ、一気に干すと、啜り泣き出した。かけるべき言葉はなく、私はただ啜り泣く彼女を見ていた。

「その女は？その女はどこに行ったの？」

突然、マージナスは顔を上げ、泣き腫らした目で私を見据えて、言った。

「わからない。大温室の中にはもういなかった」

彼女は震える手で杯を口に運んだ。飲み干す口元から金色の滴がこぼれ落ちた。

「殺して。その女を殺して」

「ナクシャツツの密林の生き物だ。この雪の中では生きられないだろう」

彼女は音をたてて、杯を卓子に置いた。

「だって、化け物なんですよ！その女が御父様を殺したのよ！見つけ出して、殺して！殺してよ！」

喚きながら彼女は立ち上がり、椅子に座った私にのしかかり、肩を揺さぶり、胸を叩いた。

「殺して！ねえ、その女を殺してよ！」

マージナスは泣きじゃくりながらそう言い続けた。私は黙って彼女の背に手を回し、抱きしめた。ブゴムの匂いと花のような女の匂いがした。

花から生まれた女の行方は、杳として知れなかった。酒場での噂話に聞き耳を立て、妓楼を徘徊し、トリプロ街に蛇革のヤムラスを訪ねてみたが、何もわからなかった。

しばらくして、ジャーネイク邸を訪ねると空き家になっていた。隣家に聞いてみても、どこかへ引越したらしいということしか、わからなかった。

その年はいつになく雪がよく降り、春の訪れは遅かった。ようやく、ラグラン大通りの木々に薄桃色の蒼が膨らみ出した頃、着飾った人々と豪華な輿の行列があつた。薄雲を割って春の日差しが差し込み、金糸銀糸を交えた錦織の幟が煌めいた。

どこかの貴族、それもかなり位階の高い奴の、古式に則った婚礼の行列のようだった。先導の小姓が花弁とともに小銭をばらまくと、人々が争って拾い上げ、ささやかな幸福を得ようとしていた。

並んで歩く二台の輿が近づいてきた。少し大きめの輿には、口髭を生やし、縮まりのない笑いを浮かべる男が乗っていた。

隣のやや小ぶりの輿は蓮の花を模しており、花びらのような形の白い台座の上に大きな笠が立ち、白い薄衣がかかって、中の花嫁の姿をぼんやりと見せていた。

風が吹き、薄衣がはためき、花嫁の姿が見えた。真っ白い婚礼の衣装と同じくらい白い肌をした細面の美しい顔が見えた。

彼女は私の視線に気がついたかのように、顔を上げてこちらを見つめた。

見紛うことなき、翠玉の瞳がそこにあつた。

輿は歩みを止めることなく、ゆっくりと遠ざかっていった。私は何をなすでもなく、ただ彼女を見送っていた。

輿が遠ざかると、私は側でぼんやりと行列と眺めていた職人風の男に尋ねた。

「あれは誰の婚礼の行列かね？」

「ラークンヴォ伯爵様の御結婚だよ。いやあ、お美しい花嫁様だねえ、眼福というものだよ」

男は幸せそうにそう言った。

「花嫁は、どこからのお輿入れだい？」

「それがねえ、雪の日に行き倒れになつていた宿無しの娘だつて言うんだよ。情け深いラークンヴォ様は、その娘を助けて、その上花嫁に迎えたのさ。何と慈悲深い御方じゃねえか」

近くで列を見送つていた何人かの女達がうなずき合い、伯爵の手柄と花嫁の美しさについての話が始まった。花嫁は実はどこかの王族の娘に違いないという噂もあるようだった。

私はその場を離れ、行きつけの酒屋に立ち寄つて、なぜいつものアイコンを買わないのかといぶかしげな顔をする店主からブゴムを一瓶買った。青い瓶のものはなく、地味な茶色の瓶に入つていた。

クーリカフ街の我が家に帰り、まだ新しい外套を掛け、蜂蜜色の酒を青硝子の酒杯に注いだ。洋灯の火にかざすと緑色に見えないこともなかった。果実の腐つたような匂いが一際強く、舌を刺すような味だったが、酔うためには問題はなかった。

私はマージナスの望みを叶えられなかったことを心の中で詫び、それからラークンヴォ伯爵の幸福そうな死に顔を想像してみた。色々な死に方、色々な幸福がある。多分、あるのだろう。

それから、水色の服の少女のことを思い出そうとした。朧な影だけが脳裏に浮かんで来たが、面立ちは波紋の中の水影のように揺らめき、はつきりしなかった。少女の名前はどうしても思い出すことができなかった。

こんなに短い間に外套を二着だめにしたことはなかった。これからもそんなことはないことを願つて祈ろうとしたが、生憎信ずる神は私にはいなかった。ただ、そう願つて、ブゴムをもう一杯飲んだ。